

後期中観派の学系と ダルマキールティの因果論

——Catuṣkotyutpādapratīṣedhahetu——

森 山 清 徹

目 次

略 号

序

I. *Satyadvaya vibhāṅgākārikā* [SDK] 12-15 とダ

ルマキールティ——因果論を巡って——

I. I. ダルマキールティの理論 [1] [⇒ SDK 12].

I. II. ダルマキールティの理論 [2] [⇒ SDK 13].

II. SDK 14a.

III. SDK 14b.

IV. I. SDK 14c.

IV. II. SDK 14c と SDK 15, 29.

V. I. SDK 14d.

V. II. *Madhyamakāloka* [Māl], *Pūrvapakṣa*.

結 論

略 号

拙稿 [1]; Kamalaśīla の唯識思想と修道論——唯識説の観察と超越——（佛教大学人文学論集第19号, S. 60. Dec.）pp. 43-77.

[2]; カマラシーラの無自性論証とダルマキールティの因果論——*Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi* の和訳研究(3)——（佛教大学研究紀要通巻第71号, S. 62. Mar.）pp. 19-73.

[3]; カマラシーラの唯識批判とダルマキールティの經量部説——無自性論証の視座: tatsārūpya と tadutpatti——（同・第72号, S. 63. Mar.）pp. 1-45.

[4]; Kamalaśīla の *Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi* (SDNS) 解説

(佛教文化研究第33号, S. 63. Mar.) pp. 1-24.

[5]; Kamalaśīla と Haribhadra——一切智者の証明を巡って——(印仏研 Vol. 35-1. Dec. 1986.) pp. 115-119.

SDNS (1): カマラシーラの *Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi* の和訳研究(1)
(佛教大学大学院研究紀要, 第9号, S. 56. Mar.) pp. 60-100.

SDNS (2): 同 (2) (同, 第10号, S. 57. Mar.) pp. 109-158.

SDNS (3): 同 (3)=拙稿 [2].

SDNS IV: An Annotated Translation of Kamalaśīla's *Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi* Part IV. (佛教大学研究紀要通卷69号, S. 60. Mar.) pp. 36-86.

Part I; The Yogācāra-Mādhyaṃika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School. Part I: A Translation of Portions of Haribhadra's *Abhisamayālaṃkāralokā Prajñāpāramitāvyaḥyā* (佛教大学大学院研究紀要第12号, S. 59. Mar.) pp. 1-58.

Part II; Idem, Part II. (坪井俊映博士頌寿記念仏教文化論攷, S. 59. Oct.) pp. 1-35.

Part III; Idem, Part III. (佛教大学人文学論集第18号, S. 59. Dec.) pp. 1-28.

AAPV; Haribhadra, *Abhisamayālaṃkāralokā Prajñāpāramitāvyaḥyā*, ed. by U. Wogihara. 1973.

Bhk I; Kamalaśīla, *Bhāvanākrama*, Minor Buddhist Text Part I & II, ed. by G. Tucci 1978. Rinsen Book Company, Kyoto.

D; the sDe dge edition, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo.

HB; E. Steinkellner, Dharmakīrti's *Hetubinduḥ*, Teil I, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text, Wien 1967.

Ichigō; M. ICHIGŌ, *MADHYAMAKĀLAMKĀRA*. 1985.

桂論文; 桂紹隆『ダルマキールテイの因果論』(南都仏教第50号) pp. 96-114.

MAK; Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkāra-kārikā*, cf. Ichigō.

Māl; Kamalaśīla, *Madhyamakāloka* (P. No. 5287. Vol. 101. Sa143b²-275a⁴, D. No. 3887. DBU MA, Vol. 12. Sa133b⁴-244a⁷).

MAP; Kamalaśīla, *Madhyamakālaṃkāra-pañjikā*, cf. Ichigō.

MAV; Śāntarakṣita, *Madhyamakālāṃkāra-vṛtti*, cf. Ichigō.

NB(Ṭ); Dharmakīrti, *Nyāyabindu*. Dharmottara, *Nyāyabindu-Ṭīkā*,
Bibliotheca Buddhica. VII. MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.

P; The Pekin edition, The Tibetan Tripiṭaka, ed. by Daisetz Suzuki,
Tokyo-Kyoto 1954-1963.

PPVṬ; Kamalaśīla, *Āryaprajñāpāramitāvajracchedikā-ṭīkā*. (P. Vol. 96.
No. 5216.)

PV; Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*.

PVP; Devendrabuddhi, *Pramāṇavārttikapañjikā*, D. No. 4217.

PVP(Ś); Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttikavṛtti*, D. No. 4220.

SDK; Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-kārikā*, D. No. 3881.

SDP; Śāntarakṣita, *Satyadvayavibhaṅga-pañjikā*, D. No. 3883.

SDV; Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-vṛtti*, D. No. 3882.

戸崎(上)(下); 戸崎宏正, 『仏教認識論の研究』上巻(1979), 下巻(1985).

TS, TSP; *Tattvasaṅgraha* of Śāntarakṣita, *-pañjikā* of Kamalaśīla. ed.
by S. D. Shastri.

VNPV; Śāntarakṣita, *Vādanyāyaprakaraṇavipaṇcitārthā*, ed. by Shastri
Swami Dwarikadas, Bauddha Bharati Series 8, Varanasi 1972.

序

Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra の学系で、重要な無自性論証の方式であり、かつ Originality に富むものと言え、まずは《一・多を欠いていることを理由とする (ekānekativiyogahetu) 無自性論証》を挙げ得るであろう。この方式を軸として、Śāntarakṣita は、*Madhyamakālāṃkāra* [MAK, MAV] (中観莊嚴論) を著わした。Kamalaśīla は、その *Pañjikā* [MAP] で、師の方式を熟知し、自らも *Madhyamakāloka* [Māl] (中観光明論) で、それを活用している。⁽¹⁾ さらに Haribhadra は、*Abhisamayālaṃkāraḥ Prajñāpāramitāvyākhyā* [AAPV] (八千頌般若釈大註) で、その論証式に基づいて、原子論批判、有形象唯識・無形象唯識批判、中観の真理の論証を大々的に展開

(1) Māl P238a⁷-246b², D215b¹-222b¹.

している。この AAPV の説は、全面的に MAK, MAV, MAP⁽²⁾ さらには Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* にも負っているものである⁽³⁾。

他方、上記の ekānekatvaviyogahetu に匹敵し得る、あるいはそれ以上に重要な意義を有すると思われるものに、後世チベットで *Catuṣkotyutpāda-pratiṣedhahetu* (mu bshi ske ba 'gag pa'i gtan tshigs) 「四極端の生起の論難」と呼ばれるものがある。これは、Jñānagarbha の *Satyadvayaṣaṅkha* (二諦分別論) [SDK 14] 及びその *Vṛtti* [SDV] に起源を有し、Śāntarakṣita のその *Pañjikā* [SDP] 及び *Vādanyāyavṛttivipaṇcītārtha* [VNVV] に、また Kamalaśīla の *Māl*, *Sarvadharmāṇiḥsvabhāvasiddhi* [SDNS] に、さらには、Haribhadra の AAPV へと継承されるものである。それ故、Jñānagarbha をも含め、彼らの学系を明瞭に示すものとして、ekānekatvaviyogahetu 以上に重要性が推知されるのである。そこで、筆者が最も問い明らかにしたいところは、この「四極端の生起の論難」すなわち、Jñānagarbha が、SDK 14 及びその SDV で、誰の、いかなる理論を対象として、その論難法を形成したかということである。結論を先取りするならば〈筆者が「四極端の生起の論難」は Dharmakīrti の理論に向けられたものであるとする直接の根拠は、Jñānagarbha 以下の論述の要所と *Hetubindu* [HB] のそれとが逐字的に一致するからであり、またその「論難」を展開する Śāntarakṣita が VNVV で *Pramāṇavārttika* [PV] 現量 (534) を引用し、それが Kamalaśīla の *Māl*, *pūrvapakṣa* にも反映しているからに他ならない。〉その骨子はすでに発表済であり⁽⁵⁾、また、それに先立って筆者は、かつて Kamalaśīla の SDNS (2) の訳注及び Tibetan

(2) Part I. pp.37-58. fn (101)-(217), Part II. pp.19-35. fn (101)-(148).

(3) ① AAPV 640⁵⁻⁶=BhK I [214] 19a4 ② AAPV 640²⁴-641¹=BhK I [212] 17a4-5 ③ AAPV 641⁵⁻⁶=BhK I [214] 19a⁵ ④ AAPV 641⁶⁻¹⁸=BhK I [216] 20b1-4 ⑤ AAPV 641¹⁸⁻¹⁹=BhK I [219] 22a6-b1 [=Māl P184b⁵-185a¹, D169b1-4] 詳細は、拙稿、Kamalaśīla と Haribhadra —Haribhadra の引用する *Bhāvanākrama*I—(仏教論叢第32号、昭和64年9月掲載予定)。

(4) lCañ skya grub mtha', Tom J.F.Tillemans, Two Tibetan Text on the "NEITHER ONE NOR MANY" Argument for *Śūnyatā*, p.371. 16. cf. 拙稿『後期中観派のダルマキールティ批判—因果論を巡って—』(印度学仏教学研究37-1).

(4a) p.38¹⁸⁻¹⁹ cf. 本稿 (134a) (135), (134b) (136) (140).

(5) 拙稿 cf. (4).

Text を発表し、そこで、SDK 14, SDV, SDP, Māl, AAPV との比定を示した。⁽⁶⁾しかしながら、それらの発表で、まだ十分に比定し尽し得ていない不備を感じていた。その後、M. D. Eckel 氏が SDK, SDV の全訳、注、研究を発表し、⁽⁷⁾研究は進歩したかに見えるが、彼は、Jñānagarbha が、Dharmakīrti に大いに負っている点を指摘しながらも、⁽⁸⁾SDK 14, 及びその SDV が、Dharmakīrti の因果論を論難の対象としていることを見出していないし、さらに、その SDK 14, SDV が Kamalaśīla の Māl や SDNS に継承されていることは、全く気付かれていない。また、Haribhadra の AAPV との比定は、部分的に示されているものの、⁽⁹⁾散発的である。その先、天野宏英氏は、Haribhadra の AAPV のその部分を訳注共に研究され、学恩は大なるものがある。また、《多なる因から単一なる果が生起する提言への論難》[=SDK 14a] は、Haribhadra が Dharmakīrti の PV 自比量を典拠に、⁽¹⁰⁾Dharmakīrti の因果論を論難するものであることを示された。しかし、SDK 14bcd に相当する部分、すなわち《多因→多果》《一因→多果》《一因→一果》の論難が、誰の理論を対象としているかを特定することはなされていない。また当時としては関連するものの研究の進度からして、やむを得ないことであろうが、その論難が Jñānagarbha に起源をもつこと、さらには、Śāntarakṣita, Kamalaśīla との密接な関係については全く示されなかった。そこで筆者は、自身の先に述べた不備に加え、この重要な無自性論証の方式を解明する必要性を思っていた。今回、明らかにしたいことは、1) 元来 Jñānagarbha は、Dharmakīrti の HB 及び PV 現量章(533) (534)での因果論を論難の対象として、SDK 14abcd 全てと、その SDV を論述しているが、その論難の方式を解明すること。2) それ

(6) SDNS (2) pp.119-128. fn (22)-(36).

(7) M. D. Eckel. Jñānagarbha's Commentary on the Distinction between the Two Truths. 1987. State University of New York Press.

(8) Eckel [cf. (7)] ch.4. esp. p.56.

(9) Eckel [cf. (7)] note 63-65, 68, 76.

(10) 天野宏英『因果論の一資料—ハリバドラの解釈—』（金倉博士古稀記念印度学仏教学論集）esp. p.344 (7), p.345 (13), p.346 (16). 同氏『因果論について—ハリバドラのダルマキールティ批判—』（印度学仏教学研究15-2）pp.(104)-(112).

に示すこと。3) それは、単に SDK 14 のみを巡る問題ではなく、SDK 12-15 等に直接関わる、すなわち Dharmakīrti の《因果効力》(arthakriyāsamārtha) を軸とする因果論及び二諦説という構造全体に関係すること。4) Haribhadra は、HB や PV 自比量での Dharmakīrti の見解のみならず、Devendrabuddhi や Śākyabuddhi の見解をも、論難の対象とし、Jñānagarva の SDK 14, SDV の土台の上に、論議をつけ加え、展開していること。

この四点の証明方法として、まず SDK 12-15 の、Dharmakīrti の理論との関係及び Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra への影響、そして SDK 14 及び SDV, SDP の訳出とその比定を Skt の得られる Haribhadra の AAPV のものから示す。そして対応する Dharmakīrti の理論を指摘する。訳注で、必要に応じ Māl, SDNS 等との比定を SDNS (2) から示す。

I. SDK12-15 とダルマキールティ——因果論を巡って——

Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra 四師間に師資相承のあることは、これまでにも示して来たところである。それは、端的に言って、次の二点に集約し得る。つまり、哲学の段階的向上と深化を修道論の体系として樹立していること。⁽¹¹⁾この点は、瑜伽行唯識学派の特に、Asaṅga や Vasubandhu の形成した修道論を踏襲し、唯識派の哲学をも克服するものとして確立している。それが一切法無自性への「道」である。他方、Dharmakīrti の経量部説、唯識説を踏襲し、さらに批判的に克服しようとする点である。⁽¹³⁾巨匠 Dharmakīrti の理論に負いつつ論議を展開することは、彼らが Dharmakīrti の影響下にあったことを如実に示している。しかしながら、Dharmakīrti の理論を批判的に克服しない限り、一切法無自性は立論し得ない状況下にあったことも事実である。このことは、彼らが、Dharmakīrti の因果論を批判の対象としている点から知られるのである。その最初は SDK 12~15 に見られる。そこに展開される Dharmakīrti の因果論批判を検討し、彼らの学系を把握しようとする。

(11) 拙稿 Part I, II, III. 及び拙稿 [5].

(12) 拙稿 [1].

(13) 拙稿 [2], [3], [4].

批判の対象となる Dharmakīrti の因果論を以下に示そう。

- [1] 事物は、結果をもたらずにふさわしい特徴を有するものである。(arthak-
riyāyogyalakṣaṇaṁ hi vastu. HB 3*^(14a)) 因果効力を有するものこそが、勝
義的存在である。(sa pāramārthiko bhāvo ya evārthakriyākṣamaḥ) (PV
I 166ab⁽¹⁴⁾) [⇒ SDK 12]
- [2] 因果関係の証明は、直接知覚と無知覚とによってなされる。(pratyakṣā-
nupalambhasādhanaḥ kāryakāraṇabhāvas tasya siddhiḥ. HB 4*⁽¹⁵⁾11-12) [⇒
SDK 13]
- [3] 感官知の生起に関する立論、例えば、眼、色、光、注意力等の集合 (sā-
magrī) から眼識が生起する。⁽¹⁶⁾ ～[8] [⇒ SDK 14, 15]
- [4] 原因の区別と無区別が結果の区別と無区別を設けるとの理論。⁽¹⁷⁾
- [5] 結果は単一であるが、その果の有する特殊性 (viśeṣa) に多様性 (=区別)
が存するとの理論。⁽¹⁸⁾
- [6] 種から芽が生起する場合のように、刹那の連続 (santāna) に基づいて、さ
らに諸原因の集合に卓越性 (atīśaya) が具わり、結果が生起するとの理論。⁽¹⁹⁾
- [7] 種等から芽等が生起する場合には、その種等は、芽等を生起する自性
(svabhāva) を有し、倉庫等において芽等を生起しない種等は、芽等を生起
する svabhāva をもたない、との理論。⁽²⁰⁾

(14a) Devendrabuddhi による arthakriyā の解説については、松本史朗『仏教論理学派の二諦説』(『南都仏教第四十五号』p.116 注(1)参照。Haribhadra も、同様な解釈を示している。「arthakriyākāritva とは結果をもたらず作用 (kāryakriyākāritva) ということに他ならない」(AAPV p.972⁷⁻⁸)。

(14) cf. 戸崎(上) p.61. fn (13). cf. SDNS IV. pp.57⁸-58¹, Tibetan Text pp.79¹⁹-80². SDNS (2) pp.115²-117¹², Tibetan Text pp.145¹⁷-147¹². 拙稿 [4] pp.13-14. fn (206) (206a), p.6. fn (21).

(15) cf. Yuichi Kajiyama; Trikaṇḍakacintā, Development of the Buddhist Theory on the Determination of Causality (インド学誌論集 Nos. 4-5, 1963, 10.) cf. 拙稿 SDNS (2) pp.138³-139⁴, 拙稿 [2] pp.22-41. VNPV p.35²¹⁻²² 本稿 (46a).

(16) 本稿 fn (46a), (49) cf. PV 自比量(73), 戸崎(下) pp.212-213. fn (361). 本稿 (47), VNPV p.30¹⁷⁻¹⁸.

(17) 本稿 fn (61), (61a).

(18) 本稿 fn (86)=(81), (81a), (82), (82a).

(19) 桂論文 p.100下, 103, 107下, 108上, 109下, 100, 111.

(20) 戸崎(上) pp.62-63. fn (16)., 桂論文 p.101.

[8], [3] の感官知の生起と [6] [7] の種から芽が生起する場合とを異った因果の形態として Dharmakīrti は峻別する。前者は条件が整えば一刹那に結果が生起し、後者の場合は、諸原因が不備なく整っても、結果が生起するに多刹那を要し、結果を生起する直前の諸原因の集合 (kalāpa) に ⁽²¹⁾ *atisāya* が付加される。

[3]～[7] の因果の理論に先立って Dharmakīrti は、彼の因果論の基盤とも言い得る理論 [1] [2] を HB に於て展開している。この Dharmakīrti の基本的立場を Jñānagarbha 及び Śāntarakṣita は、どう対処しているかを [1] に関しては SDK 12 によって、[2] に関しては、SDK 13 に対する *vṛtti*, *pañjikā* をもとに順に見てみよう。

I. I. ダルマキールティの理論 [1] [⇒ SDK 12]

[1] の理論は PV 現量 (3) でも周知のものである。すなわち、「因果効力 (*arthakriyāsamartha*) を有するものが、勝義的存在 (*paramārthasat*) であり、そうでないものは、世俗的存在 (*saṃvṛtisat*) ⁽²²⁾ である。」この Dharmakīrti の因果効力の有無を巡る二諦説を以下に示すように Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra は、因果効力を有するものを実世俗 (*tathya**saṃvṛti*), そうでないものを邪世俗 (*atathya*-, *mithyā*-*saṃvṛti*) と規定し、結局のところは、Dharmakīrti を批判している。Jñānagarbha は SDK 12 で次のように世俗を二分している。「顕現しているものとしては、等しくとも、因果効力 (*arthakriyāsamartha*) を有するから、また有さないから、実 (*tathya*) と邪 (*atathya*) 世俗が区別される。」この Jñānagarbha の見解に Śāntarakṣita はその SDK 12 に対する *pañjikā* ⁽²³⁾ で、さらに MAK 64, 65 及びその MAV ⁽²⁴⁾ で、踏襲している。Kamalaśīla は、MAP ⁽²⁵⁾ で、Jñānagarbha, Śāntarakṣita の見解を受け継いでいるし、さらに、SDNS ⁽²⁶⁾ で次のように述べている。

(21) 桂論文 p.110上.

(22) 本稿 fn (14).

(23) SDV 6b⁵.

(24) SDP D26b⁷-27a⁷.

(25)(26) M. Ichigō pp.202-211.

(27…

他の者 (Dharmakīrti) 達〔仏教論理学派〕は次のように提言する。「因果効力 (arthakriyāsamārtha) を具えたものが、勝義的存在 (paramārthasat) であるが、そうでないものは、世俗的存在 (sāmṃvṛtisat) である。」と、それは、この場合、実世俗 (tathyasāmṃvṛti) に基づいて、凡夫 (pṛthagjana) を撰する〔為に〕勝義的存在の特徴であると述べるのなら、そのとき、この〔言明〕は、道理に適っている。……勝義として、あらゆる事物に、因果効力のあることは成り立たないから。^{(27a)…(27)}

また Haribhadra は、

(28…

最初に、自我 (ātman) 等を否定する点で、外界の対象を設定し、それから、遍計所執性、依他起性、円成実性を述べることによって、三界唯心の理解へと入って、その後、正しく (samyak) 結果をもたらすこと (arthakriyā) に、適合するものと、しないものが、実・邪 (tathyātathya) の区別によって、二種の世俗諦、つまり、吟味しない限り素晴らしく (avicāraikaramya)、それぞれ前の自己の因に依存することを説示して、実世俗に基づいて、見られる (顕現する) がまさに (yathādarśanam)、幻の人によってこそ、布施等が実践されなくてはならない。また勝義としては、不生が修習されなくてはならない。^{…(28)}

特に下線部は、MAK 64, 65 及びその MAV⁽²⁹⁾ に従ったものであろうし、さらにまた、

(30…

世俗とはどういうものかというなら、

因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有するものこそ、考察の重みに耐え得ないから、世俗的な (sāmṃvṛta) 実在 (vastu) と言われる。^{…(30)}

このように Haribhadra にあっても、実・邪の世俗諦の区分を、Jñānagarbha 以来の arthakriyāsamārtha の有無を基準に設定している。この点では Dharmakīrti の理論〔1〕を踏襲しつつも、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を

(27) 本稿 fn. (14) の SDNS IV, 拙稿 [4], pp.13-14. fn (206) (206a).

(27a) cf. SDV 6b⁷, SDP D27a⁸ で〈効果的作用も無自性〉と述べられている。

(28) AAPV p.594¹⁸⁻²⁴.

(29) 本稿 fn (25) (26).

(30) AAPV 637²⁶⁻²⁷.

有するものを実世俗 (tathyasamvṛti) と位置付ける点では、⁽³¹⁾勝義として、批判的克服を図ろうとしている。この見地が、Jñānagarbha から、Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra へと継承されることが知られた。さらに Kamalaśīla にあっては、この arthakriyāsamārtha の有無という観点が、常住性 (nityatva) 批判、説一切有部の三無為説批判、⁽³²⁾三世実有説批判、⁽³³⁾さらに Śāntarakṣita, Haribhadra も含めて形象虚偽論批判の際に運用されるのである。

I. II. ダルマキールティ理論 [2] [⇒ SDK 13]

[2]の理論に対する Jñānagarbha の論難は次のものである。SDK 13 に関する SDV で、

^{(35)...}因果関係 (kāryakāraṇabhāva) を確定するに、汝 (Dharmakīrti) には方法がない。というのは、1) 無形象知 (nirākārajñāna) が対象を把握することは不合理である。^{(35 a)...}〔この知覚は青色であるが、黄色ではないという決定が成り立たない。近接した因がないからである。それ故、その〈無形象知〉によって、対象を把握することが、^{...35 a)}どうしてあろうか。(SDP ≡ TSP)〕形象 (ākāra) は、確実な認識手段 (pramāṇa) ではないからであり、不合理であるからである。2) 有形象知 (sākārajñāna) 〔によって、対象を把握することは〕不合理である。なぜなら、形象 (ākāra) は、確実な認識手段 (pramāṇa) ではないから。〔事物 (bhāva) が形象 (ākāra) を遍充しない。無常 (anitya)

(31) この見解自体は、Jñānagarbha よりも、さらに先行する清弁 (Bhāvaviveka) によって、確立されていた。cf. 野沢静証「中観両学派の対立とその真理観」(仏教の根本真理) p. 475. 戸崎(出) pp. 64-65.

(32) SDNS (1) pp. 76-83. 拙稿 [3] pp. 19-22. BhK I [201] 10a1-2.

(33) SDNS (2) pp. 111-119. esp. p. 115. fn (10b) TS. 1737ab, 1820. したがって、この視点からの三世実有説批判は Śāntarakṣita に範を得たものと言えよう。

(34) Part II. pp. 23²⁸-25¹⁸. 拙稿 [3] pp. 15-16. fn (33).

(35) SDV 7a²⁻⁴, Part II. p. 11-12. fn (25) (26).

(35a) SDP D27b⁴.

TS. 535cd.

nākārānaṅkitatve'sti pratyāsattinibandhanam

TSP p. 226⁹⁻¹⁰.

athā nākāraṁ tadā nilāspadaṁ samvedanaṁ na pītasyeti vyavasthānaṁ na siddhyet sarvatra bodharūpatayā viśeṣābhāvena pratyāsattinibandhanābhāvāt cf. PPVṬ P225a⁶-b¹.

性が、認識対象 (prameya) を遍充しないように。^(35b) 何故かといえば、多様な本性を有して顕現している単一なもの〈知〉にとって、諸の形象 (ākāra) が、どうして真実であり得ようか。その〈知の〉単一性が崩れてしま^(35c)うからである。〔そうであれば、知の本体が、単一であることは不合理である。諸の形象 (ākāra) と〈知は〉別ではないから、形象自体のように、〈知は多なるものとなろう。〉また、〈知は〉諸の形象と区別されない。〈諸の形象は〉知の単一の本体と区別がないから、〈諸の形象は〉知の本性のように〈単一となろう。〉〕^(35d) そうであれば、〔無形象あるいは有形象知が、対象を把握しないのであれば〕直接知覚 (pratyakṣa) と無知覚 (anupalabdhi)^(35e)によって、因果関係は成立しない。〔有形象あるいは無形象の直接知覚によって、対象を確定することは不合理である。〈直接知覚に、有形象あるいは無形象〉^(35f)以外のあり方はない。無知覚 (anupalabdhi) とは、壺等を欠いている大地等を認識する故、^(35g)直接知覚 (pratyakṣa) である。直接知覚と無知

近接性 (pratyāsatti) が、認識成立の根拠として述べられる点については、PV 現量 (47) (324d) (325). 戸崎(田) p.115, (f) p.8. そして pratyāsatti が無形象知識論批判のポイントとなる点については、拙稿 [3] p.33-34. [I.I.II]. また、Kamalaśīla は TSP で、Haribhadra は、AAPV で (35a) の見解全体を反論者の弁として取り挙げ、無形象知 (nirākārajñāna) の有するその矛盾点が、一切智者 (sarvajña) の智では克服されていることを示し、一切智者の智の整合性を論証している。cf. 拙稿 [5] p.(116). 注16), 17).

(35b) SDP D27b⁵.

(35c) cf. TS. 535ab.

sākāre nanu vijñāne vaicitryaṁ cetaso bhavet

TSP. p.226⁷⁻⁹.

yadi sākāraṁ jñānaṁ tadā citrāstaraṇādiṣu jñānasya citratvaṁ bhavet / na caikasya citratvaṁ yuktam atiprasaṅgāt /

Eckel [cf. (7)] p.80, p.129. Note (60). PV 現量 (357), 戸崎(田) pp.43-44.

anyathāikasya bhāvasya nānārūpāvabhāsinah /
satyaṁ kathaṁ syur ākāras tadekatvasya hānitaḥ //

(35d) SDP. D27b⁷-28a¹, Part I. II. III., 拙稿 [5]. p.(117). [2].

(35e) SDP. D28a².

(35f) cf. TSP. p.226¹¹⁻¹⁴.

yato bhavatā'pi sākārānākārapakṣābhyāṁ avāśyam anyatarah pakṣo'ṅgi-
karttavyo' anyathā' rthagrahijñānaṁ na sidhyet / na cāpy etatpakṣadvayav-
yatirekeṇānyaḥ prakāro'sti yena jñānaṁ arthaṁ grahīṣyati /

(35g) 拙稿 [2] p.39. fn (46) (46a) (46b).

cf. NB. II-13.

tatrānupalabdhir yathā na pradeśaviśeṣe kvacid

覺^(35h)の二]とは別なあり方を考えよ。もし、因果関係を理解させる別な方法があると言うなら、それを述べてみよ。請うている我々に対して、出し惜しみすることが、どうして正当なことであろうか。

[] は pañjikā により、〈 〉 は筆者が補ったものである。

この Jñānagarbha, Śāntarakṣita による Dharmakīrti の [2] の立論に対する論難は、次のように要約される。つまり、直接知覚 (pratyakṣa) と言い得るものは、1) 無形象知 (nirākārajñāna) か、2) 有形象知 (sākārajñāna) かの何れかであると二分し、それ以外の pratyakṣa はあり得ないとの立場から、まず無形象知によっては対象は把握され得ないことを述べる。その理由として Śāntarakṣita は無形象知によっては、青色、黄色の区別がなし得ないと解説し、その理由を〈近接した因がないから〉⁽³⁶⁾としていた。この理由として述べるものも、Dharmakīrti の理論を逆用したものである。一方、2) 有形象知 (sākārajñāna) の場合は、単一な知 (jñāna) と多様な形象 (ākāra) との間に存する一・多の不整合性を根拠として、有形象知による対象の把握は不合理であることを示していた。何れにしても、ākāra が確実な知 (pramāṇa) をもたらすものとはなり得ない。この1), 2)によって、まず直接知覚 (pratyakṣa) による対象の把握に不合理の存することを示し、さらに無知覚 (anupalabdhi) を、直接知覚に過ぎないものとする事で、再批判を避けていると言える。この無知覚 (anupalabdhi) を直接知覚 (pratyakṣa) と見なす見解を Kamalaśīla は Māl で忠実に継承している。これらが Dharmakīrti の [2] の立論に対する論

ghaṭa upalabdhilakṣaṇaprāptasyānupalabdher iti //

NBṬ. p.30¹⁻⁴.

yady api ca nāsti ghaṭa iti jñānam anupalabdher eva bhavaty ayam eva cābhavaniścayaḥ tathāpi yasmat pratyakṣeṇa kevalaḥ pradeśa upalabdhas tasmād iha ghaṭo nāstīty evaṃ ca pratyakṣavyāpāram anusaraty abhāvaniścayaḥ / tasmāt pratyakṣasya kevalapradeśagrahaṇavyāpārānusāryabhāvaniścayaḥ pratyakṣakṛtaḥ /

cf. Māl P144b³⁻⁴, D134b³⁻⁴ [pūrvapakṣa] ⇒ P185b³, D170a⁴⁻⁵ [uttarapakṣa], AAPV. 636²⁷-637¹⁰. この一切法無自性論証を巡る、無知覚 (anupalabdhi) と空性 (śūnyatā) の問題については、『無自性論証と直接知覚—yogipratyakṣa』と題し、拙稿を準備中である。

(35h) SDP. D28a²⁻³.

(36) cf. 本稿 fn. (35a) 近接性 (pratyāsatti).

(37) 拙稿 [2] p.39. fn (46) (46a) (46b). cf. 本稿 fn (35g).

難である。これに、続いて、[3]～[7]に対する論難を Jñānagarbha, Śāntarakṣita は SDK 14 及びその SDV, SDP で展開するわけである。

上記の、直接知覚を 1) 無形象知、2) 有形象知に区分し、吟味する方法及びその根拠は、Kamalaśīla, Haribhadra に於ては、一切智者 (sarvajña) の智の整合性を検証する場合に、そのままの形で継承されている。⁽³⁸⁾さらに、[2]《因果関係は直接知覚 (pratyakṣa) と無知覚 (anupalabdhi) によって証明される。》を論破するに、Kamalaśīla は、pratyakṣa に関して、

^{(39)...}知は、自己認識の直接知覚ではあっても、それから、因果関係は証明されない。自己の本体は、単一である故、原因と結果となっている二なる自性を有するものと矛盾するからである。……それ（自己認識の直接知覚）は、無分別 (avikalpa) であるから。[その直接知覚によつては] 全く必然的關係は把握されないし、因果関係も把握されない。過大適用の過失となるからである。^{...39)}

そして、無知覚 (anupalabdhi) については、上記の Jñānagarbha の場合と全く同様、それは、《別なものを認識することを本性とする、直接知覚である⁽⁴⁰⁾》と表明している。

他方、Haribhadra の場合も、因果関係が直接知覚によって証明され得ない、とする理由を Kamalaśīla と同様、直接知覚 (pratyakṣa) の無分別なる性質 (nirvikalpatva) に求めている。すなわち、

^{(41)...}一方、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) は、確実な認識 (pramāṇa) に妥当した自性を有するものであると述べられることは、直接知覚 (pratyakṣa) によって知られることではない。直接知覚は、無分別な性質 (nirvikalpatva) 故、[因果関係が] 確実な認識に妥当した自性を有すると決定する効力 (sāmarthya) を欠いているからである。^{...41)}

これは、Dharmakīrti の理論[2]を《直接知覚の特質》すなわち《概念知を離れ、迷乱無きこと》を逆手に取って論難しているものである。そして、因果

(38) 拙稿 [5] pp.386-384 [A].

(39) 拙稿 [2] p.33. fn (35).

(40) 拙稿 [2] cf. 本稿 fn (37) (35g). Haribhadra AAPV. p.637¹⁻³.

(41) AAPV. 971²⁸-972². on [SDK 14a].

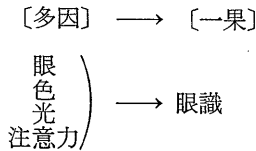
(42) NB. I-4, PVin. p.40², 戸崎(上) p.388. fn. (20). PV. III. K °123. cf. 拙稿 [2]

関係は、世俗として承認される、と導く点は、Jñānagarbha の [SDK 13] の [SDV] に端を発し、Śāntarakṣita⁽⁴³⁾, Kamalaśīla⁽⁴⁴⁾, Haribhadra⁽⁴⁵⁾ へと継承されたことが知られる。

II. SDK 14a

上に見た Dharmakīrti の因果論一般の理論[1] [⇒ SDK 12] 及び [2] [⇒ SDK 13] は共に、次の [SDK 14] 及び [SDV] で、具体的な因果論の検証、すなわち「四種の因果関係の公式」にまとめられ、組織的に論破される。それは直接的には [3]～[8] に示した Dharmakīrti の HB, PV に於ける因果論を逐一論破して行くものである。このことは、以下での比定によって知られよう。それと共に、Jñānagarbha から Haribhadra に至る学系を Kamalaśīla の SDNS, Māl との同定は脚注で、Haribhadra の AAPV のものは、[SDK 14] の [SDV] の訳出と共に、その Skt 文を列挙する。以下 [SDK 14a] の前提となる Dharmakīrti の見解とは、次のものである。PV 自比量 (73) の自注に「例えば、感官、対象、光、注意力が、単一な、色に対する知識を生起するように (yathendriyaviṣayālokamanaskāra . . . rūpavijñānam ekaṁ janayanti)⁽⁴⁶⁾」及び PV 自比量 (82a) 「多も単一な果を生起する (ekakāryo'neko'pi)^(46a)」, PV 現量 (534ab)^(46b) これが、《多なる因から単一な果が生起する》理論として取り上げられ、Jñānagarbha 以下によって次のように論難される。

図A



fn (11), (30a), (33). TSP. p.449⁹⁻¹⁰.

pratyakṣaṁ kalpanāpoḍham abhrāntam

(43) MAK. 84.

(44) SDNS (2) p.135. fn. (58b), 拙稿 [2] p.29. fn. (26), (53).

(45) AAPV 634¹⁷, 637²⁵⁻²⁷. cf. 本稿 fn (30).

(46) Haribhadra も、Jñānagarbha の [SDK 14] その [SDV] に基づいて「四極端の生起」を論難する冒頭で Dharmakīrti の理論 [1] を挙げ、すなわち「因果効力を

〔論難 1〕

^(47...)
(A)多によって単一な事物は作られない。〔SDK 14a〕

というのは、自性の区別、すなわち眼等〔色、光、注意力等〕から、区別されない〔単一な〕結果〔眼識〕が生起するなら、因の区別が〔果の〕区別を設けないであろう。それ（因）が、区別され〔多であつ〕ても、〔果に〕区別がない〔単一だ〕からである。(B)〔因の〕無区別が無く〔多であつ〕ても、〔果は〕無区別〔すなわち単一〕となる故、〔因の〕無区別〔すなわち単一性〕も、〔果の〕無区別〔すなわち単一性〕を作らないであろう。(C)それ故、〔果の〕区別と無区別は、無因となろう。全てのものも、それ〔区別(多)と無区別(一)]とは別ではないから、あらゆるものも無因となろう。そうであれば、常に存在するか、しないか、ということになろう。〔SDV 7a⁶-b¹〕 (=AAPV 969²⁸-970⁵) ^(47 a...) (A)yady anekam kārāṇam ekakāryakṛd iti pakṣas tadā cakṣūrūpālokamanaskārādibhyaś cakṣurviññānasyaikasyotpat-tav abhyupagamyamānāyāṁ kārāṇabhede'pi kāryasya bhedābhāvān na kārāṇabhedo bhedakāḥ kāryasya syāt (B)tathā ca kārāṇābhedābhāve'pi kāryasyābhedān na kārāṇābhedaḥ kāryasyābhedako bhavet (C)tatas ca kārāṇābhedābhedav anvayavyatirekābhyām anapekṣamāṇau kāryasya bhedābhedav ahetukau syātām evaṁ ca sati bhedābhedāvyatirekād viśvasya nityaṁ sattvam asattvaṁ vā syād ahetor anyānapekṣaṇāt) ^(47 a)

Jñānagarbha による〔SDK 14a〕に対する解説はここで終っている。それの前提となる Dharmakīrti の理論とは PV 自比量 ^(47 b) (73) に示されるものであ

有するものが、ここでの勝義的存在である。と言われるから、確実な認識 (pramāṇa) に妥当した因果関係 (kāryakārāṇasambandha) によって、縁起したもののこそが、真 cf. 実な如来である、と認識している人の執着を否定する為に述べる。」(AAPV 969¹⁸⁻²⁰, 前掲論文、天野宏英「因果論の一資料—ハリパドラの解釈— p.323) と Dharmakīrti の理論 [1]~[8] が〔SDK 12〕~〔SDK 15〕に基づいて包括的に吟味されるものであることを示唆している。

(46a) ed. Gnoli (SOR. XXIII) p. [41]¹⁻³, [44]²⁷, 戸崎(下) pp.212-213. fn (361). cf. 本稿 (137), (15). PV現量 (47), 戸崎(上) p.115. (46b) cf. 本稿 (49) (132a).

(47) SDP D28b⁷-28a⁵, また Māl, SDNS との同定は, SDNS (2) pp.120-121. fn (24)-(26). ⇒ 本稿 (59).

(47a) ⇒ 本稿 (61) (61a) (61b).

(47b) cf. 本稿 (16), (47).

ろう。しかし [SDK 14b] 以下をも含めて、それ等が Dharmakīrti の理論を対象としての論難であることを特定する為に、さらにその継続した論議を Śāntarakṣita の SDP によって見てみよう。なお、その SDP の論議の展開が、Haribhadra の AAPV と同定される故、Haribhadra は AAPV で、Jñānagarbha のみならず、Śāntarakṣita の論議の展開の仕方をも、そのまま踏襲していることが知られよう。

Jñānagarbha の〔論難 1〕を受けて、SDP では、

^{(48)...}
〔反論②〕 何故か。

〔論難 2〕 別の因に依存しないからである。依存するなら、諸事物は、時として見られるもの (kādācitka) ^{...48)} である。

〔反論③〕

^{(49)...}
果を生起するものは、〔因〕集合したもの (sāmagrī) である。これも区別と無区別に従うことは明白であり、その〔集合した因〕肯定と否定 (anvayavyatireka) に従うことによって、果の区別と無区別が設けられる。したがって、^{...49)} どうして無因となろうか。[SDP D29a⁵⁻⁶] (= AAPV 970⁶⁻⁸ ^{(49 a)...} nanu ca sāmagrī janayitṛī kārṇasya tasyāś ca bhedābhedānuvidhānacaturv imav anvayavyatirekānuvidhāyitayā kārṇasya bhedābhedau ataḥ katham tav ahetūkau bhaviṣyata iti cet) ^{...49 a)}

〔論難 3〕

^{(50)...}
それは不合理である。というのは、諸の全体 (samagra) とは別に集合 (sāmagrī) というものは、何ら存在しないからである。それ〔眼〕等も、相互に対立した自性のもの (parasparavyāvṛttasvabhāva) で、区別されたものであって、無区別で単一な果〔眼識〕を生起し得るなら、別の〔因〕集合 (sāmagrī) の中にある諸の全体 (samagra) も、どうして、それ〔眼識〕を生起しないのであるか。 ^{...50)} [SDP D29a⁶⁻⁷] (= AAPV 970⁸⁻¹⁸ ^{(50 a)...} naitat sārām

(48) SDP D29a⁵. cf. 本稿 (61) (61b).

(49) cf. PV 現量 (534ab) 戸崎(下) p.214.

na kiñcid ekam ekasmāt sāmagryād sarvasambhavaḥ / cf. 本稿 (132a).

(49a) cf. Māl 本稿 (134) (134a), Māl P234a¹⁻², D211b⁵⁻⁶.

(50)(50a) cf. Māl P234a⁵⁻⁷, D212a¹⁻².

tathā hi na sāmagrī nāmānyā kācana samagrebhyaḥ kiṃ tarhi samagrā
eva bhāvāḥ sāmagrīśabdavācyaḥ te ca parasparavyāvṛttasvabhāvaś cakṣu-
rādayo bhinnās santaḥ yady ekam evābhinnaṃ cakṣurvijñānaṃ kāryam
upajanayituṃ śaktāś tadā sāmagryantarāntaḥpātino'pi bhāvāḥ samagrāḥ
kim iti cakṣurvijñānasyopajananaṃ na kuryuḥ^{...50 a)}

〔反論④〕

^{(51)...}
それ（別の〔因の〕集合）とは区別されるから〔眼識という果を〕生起しな
^{...51)} い。〔SDP D29a⁷〕 (= AAPV 970¹⁴ ^{(51 a)...} bhinnatvena cakṣurādibhyaḥ kṣity-
ādayo nopajanayantiti cet)^{...51 a)}

〔論難 4〕

^{(52)...}
〔問題となるところは〕同じである。^{...52)}〔SDP D29a⁷〕

〔反論⑤〕

^{(53)...}
それ（果）を生起する自性の卓越性（svabhāvātīśaya）を体とするものが、
知覚を起こすのであって、それ等〔果を生起する自性を有した諸原因〕が、
それ（果）を生起させるが、他のもの〔果を生起する自性を有しない諸原因〕
が、〔果を生起するの〕ではない。^{...53)}〔SDP D29a⁷-b¹〕 (= AAPV 971⁵⁻⁶
^{(53 a)...} atha manyase parasparavibhinnamūrtayo'pi cakṣurādaya eva kenacit
svabhāvātīśayena cakṣurvijñānajanane niyatā nāpare kṣityādayaḥ)^{...53 a)}

〔論難 5〕

^{(54)...}
〔その反論⑤〕も迷乱している。それ（果）を生起する単一な自性の卓越性
（svabhāvātīśaya）から区別のない（多なる）体のもの（因）が理解されると
いうことは、これ等、眼等が相互に区別される場合であって、そうしたことは、
直接知覚（pratyakṣa）等の確実な認識（pramāṇa）と矛盾するであろう。
また、それ（単一な自性の卓越性）を生起する自性のもの（因）も区別され
ることになろう。自性を区別することは、眼等を区別することであるからで
ある。そうであれば、自性の区別が、眼等であると言われる誤謬となろう。

(51), (51a).

(52)

(53)(53a) cf. PV 量 (27), 本稿 (75) (75a).

(54), (55), (56).

まさしくそれ故に、その主張は、正しくないと言う。^{…54)} [SDP D29b¹⁻³]

〔反論⑥〕

^{(55)…}それ等(諸原因)から、それ(果)を生起する自性の卓越性 (svabhāvātīśaya) は、区別される。^{…55)} [SDP D29b³]

〔論難 6〕

^{(56)…}そうであるとしても、次の誤謬がある。果を成立させる効力 (sāmarthyā) という卓越性 (atīśaya) を有したそのものの自体が、知覚を起こす。果を生起する作用が、卓越性 (atīśaya) を有すると認められるが、眼等の別のものは、そうではない(卓越性をもたない)。そういうわけで、〔眼等は〕あらゆる効力 (śakti) を欠いている状態にある故、無存在を自性とするもの(眼等)とは、別な何らかのその自性があるなら挙げてみなさい。それ故、汝 (Dharmakīrti) は、直接知覚 (pratyakṣa) 等の矛盾を有していよう。^{…56)} [SDP D29b³⁻⁵]

以上見たとおり、〔論難 1〕は Jñānagarbha によってなされたものであり、〔反論②〕より〔論難 6〕までは Śāntarakṣita の SDP によるものである。Skt 文は Haribhadra の AAPV からの回収である。Haribhadra のものは、Kamalaśīla の SDNS, Māl と共に、部分的にはかつて示した。⁽⁵⁷⁾ このように彼等の学系は具体的に知られるとしても、これ等の論議の展開が、Dharmakīrti の、いかなる理論を前提としているかを検討する必要がある。このことを通じて、彼らの学系の内実が知られ得る。

SDK 14a は、いきなり Jñānagarbha の〔論難 1〕⁽⁵⁸⁾によって始まるが、この〔論難 1〕⁽⁵⁸⁾(A)に先行するものが、Dharmakīrti の HB に見出される。そこでは Dharmakīrti が、対論者から同様な詰問を投げ掛けられている。すなわち、

^{(59)…}区別された自性を有する眼等の協同因 (sahākārin) から、単一な結果 (eka-

(57) cf. 本稿 fn (47).

(58) 本稿 (47) (47a).

(59) HB 9*13-14.

bhinnasvabhāvebhyāś cakṣurādibhyaḥ saha-kāribhya ekakāryotpattau na kāraṇabhedāt kāryabhedāḥ syād iti cet. ⇒ 本稿 (47) (47a). [桂論文] p.104 に訳出。

kārya) [眼識] が生起するなら、原因の区別 (kāraṇabheda) から、結果の区別 (kāryabheda) が起こらないであろう。^{...59)} [HB 9*18-14]

この詰問が、Jñānagarbha の [論難 1] (A) に、そのまま活用されたことは明らかであろう。この論難も含め、[反論②] 以下 [論難 6] に至るまでのものが、Dharmakīrti のいかなる理論をターゲットにしているのでしょうか。

Dharmakīrti は、〈異なった種 (vijātiya) のものからも、同種の果があり得る。例えば、牛糞 [の形象] から蓮根 [の形象] が [知覚される] ように。⁽⁶⁰⁾〉との対論者の詰問に対して、次のように答論している。

^{(61)...} 異種のものから、[同種のも] が生起することはない。……なぜなら、諸事物に、全く同じ形象 (ākāratulyatā) があるにしても、真実としては、[その類似した形象は] 特相 (nimitta) ではない。何らの諸の形象の区別がなくとも、[形象とは] 別の特殊性 (viśeṣa) から、種の区別 (jātibheda) が知られるからである。^{(61 a)...} 異なった特徴 (vilakṣaṇa) を有する集合 (sāmagri) によってさえも、異ならない (同じ) 特徴を有した果 (avilakṣaṇakārya) が生起するなら、原因の区別と無区別 (kāraṇabhedābheda) から、結果の区別と無区別 (kāryabhedābheda) が、起こらない故、全てのもの (viśva) の区別と無区別が、無因 (ahetuka) となろう。^{...61 a)} というのは、[原因の] 区別から、[結果の] 区別が起こらない故、[原因の] 無区別からも、[結果の] 無区別は起こらない。また、それ等 [区別と無区別の二] とは別な何らかの事物の自性 (bhāvasvabhāva) というものはない故、諸事物は無^{(61 b)...}

(60) HB 20*18-19.

nanu vijātiyād api kiṃcid bhavad dṛṣṭam, tad yathā gomayādeḥ śālūkādih.

(61) HB 20*19-21*10.

na vijātiyād utpattiḥ....., na hy ākāratulyataiva bhāvānām tattve nimittam, abhinnākārāṇām api keśāṃcid anyato viśeṣāj jātibhedadarśanāt. ^{(61 a)...} anyathā hi vilakṣaṇāyā api sāmagryā avilakṣaṇakāryotpattau na kāraṇabhedābhedaḥ ^{...61 a)} kāryabhedābhedaḥ ity ahetukau viśvasya bhedābhedaḥ syātām. tathā hi na bhedād bheda ity abhedād api nābhedaḥ, tadvyatiriktaś ca na kaścid ^{(61 b)...} bhāvasvabhāva ity ahetukatvād bhāvānām nityam sattvam asattvam vā syāt, ^{...61 b)} apekṣyasyābhāvāt. apekṣayā hi bhāvāḥ kādācitkā bhavanti. ⇒ 本稿 (47) (47a).

(61a) cf. AAPV 971¹⁰⁻¹³.

因であるから、常に存在するか、存在しないか、ということになる。〔原因に〕依存しないからである。なぜなら、〔因に〕依存することによって、諸事物は、時として見られるものだからである。〔HB 20*¹⁹-21*¹⁰〕

Jñānagarbha による〔論難1〕と Śāntarakṣita による〔論難2〕は、いま見た Dharmakīrti の言明を逆用してなされたものであろう。また〔反論③、④〕も、その Dharmakīrti の言明から導出されよう。すなわち、眼、色、光、注意力という諸原因の集合 (sāmagrī) から眼識は生起するが、種、大地、水という異った諸原因の集合からは生起しない。この相違の根拠を Dharmakīrti は、種の区別 (jātibheda) と言っていると思えるが、このことが、〔反論③、④〕及び〔論難3、4〕の焦点である。

Haribhadra は、〔反論⑤〕に先立って、それは、〔反論④〕とも関連するが、因果関係を成立させる自性 (svabhāva) の問題について論議を展開している。つまり眼等の集合から眼識は生起し得るが、大地等の集合からは生起し得ない。その根拠を、反論者は、〈眼等には、眼識を生起し得る自性があるから〉 (janakasvābhāvya⁽⁶²⁾) という点に求めている。そこで自性 (svabhāva, prakṛti^(62a)) が論点となるのである。ここでの論議の対象となる Dharmakīrti の理論とは、PV 現量 (533abc^(62a)) 及び次のものである。〈種等は、芽等を生起する自性を有するけれども、水等の別の原因に依存するから (種等) だけが (芽等を) 生起

tasmād evaṃvidha hetuparāṃparāyāś ceṣṭatvenānavasthā'pi na kṣatim āvahati
evaṃ vilakṣaṇakāraṇakalāpāc cāvilakṣaṇaṃ kāryaṃ jāyata ity etāvataivān-
śena hetubhedābhedaḥbyāṃ phalasya bhedaḥbhedaḥ uktav iti.

cf. PV 自比量 Gnoli [22]¹⁷⁻¹⁸.

tasmāt kāraṇabhedābhedaḥbyāṃ kāryabhedābhedaḥ / tan na dhūmō'rthād
dṛṣṭākāravijātiyād bhavaty ahetukatvaprasaṅgāt /

cf. PV 現量 (251), 戸崎(出) p.350.

(61b) cf. PV 自比量 (35).

nityaṃ sattvaṃ asattvaṃ vā'hetor anyānapekṣaṇāt /
apekṣāto hi bhāvanāṃ kādācitkatvasāmbhava //

天野宏英前掲論文『因果論の一資料』p.343. (2).

(61c) cf. 本稿 (47).

(62) AAPV 970¹⁶.

(62a) cf. PV 現量 (533) abc. 戸崎(下) p.212-213. 及び fn (361), PV 自比量. (73).

「事物は、多あるいは単一の効力をもたない場合であっても、自性によってこそ、多あるいは単一の果を生起する、と述べた。」(nānaikaśaktyabhāve'pi bhāvo nānaika-kāryakṛt / prakṛtyaiveti gaditaṃ) cf. 本稿 (114).

するのではない。⁽⁶³⁾との対論者の詰問に対し、Dharmakīrti は

⁽⁶⁴⁾...
そうではない。その〔果を生起し得る〕自性を有するものが、〔その果を〕
生起する (janana) から、しかし、〔その果を〕生起しないもの (ajanaka)
には、その〔果を生起し得る〕自性が存在しないからである。^{...64)}〔HB 8*18-19〕
と因果論に関する自性 (svabhāva) に言及している。

同様に、彼はまた次のように述べる。

⁽⁶⁵⁾...
諸の結果の自性には、原因の自性によって作られた性質があるから、また原因に依存しないものは、無因となってしまうからである。したがって、煙
〔結果〕を生起するものは、火等〔諸原因〕の集合 (sāmagri) によって起こる特殊性 (viśeṣa) である。火等の集合によって起こる特殊性によって生起せしめられたものが、煙であるから、因果の二は、そのように、自性 (svabhāva) によって確定されるから、その〔自性〕とは異なった種のもの (tadvijātiya) から生起するのではない。その果が、原因を逸脱することはない。したがって、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) が、成立するなら、結果は、原因によって遍充されることが成立する。^{...65)}

つまり芽等を生起し得る自性を有した種等にこそ、因果効力が存するわけであり、したがって倉庫等にあって芽等を生起し得ない種子等には、因果効力という自性が存在しないのである。したがって、条件が整い、結果 (芽等) を生起する直前の諸原因 (種等) にこそ、結果をもたらし得る効力すなわち自性 (svabhāva) が具わる、⁽⁶⁶⁾と Dharmakīrti は述べるわけである。そこで対論者は、さらに問うている。

そのあらゆる協同して作用する因に効力という自性があるなら、他のものの機能とは何であるのか。 (teṣu sarveṣu saha-kāriṣu samarthasvabhāveṣu ko'parasyopayoga iti cet) ⁽⁶⁷⁾〔HB 9*5-6〕

この問いを Haribhadra は自らの問いとして活用していると思える。すなわ

(63) HB 8*16-18, 〔桂論文〕 p.101上. に訳出。

(64) HB 8*18-19, 〔桂論文〕 p.101上. に訳出。

(65) HB 20*11-17.

(66) cf. 戸崎(出) pp.62-63. fn (16), 〔桂論文〕 p.101下。

(67) HB 9*5-6.

ち、

もし、そのように単一なものによって、その果が作られるなら、その因果に関して、諸の他のものの必要性とは何であるのか。(yady evam ekenaiva tatkāryaṃ kṛtam iti kim apareṣāṃ tatkāryakāraṇe prayojanam)⁽⁶⁸⁾ [AAPV 970²⁴⁻²⁵]

この詰問に対する応答、すなわち Haribhadra からすれば反論者の弁明とは、HB に於ける Dharmakīrti の以下の見解に他ならない。

⁽⁶⁹⁾諸事物には、何らかの英知を先に働かせるということは決してないのである。というのは、[もし、あり得るなら]これは、単一のものであっても、達成され得る、その場合、我々によって、何がなされる必要があるのか、と他の〔原因〕は退いてしまおう。なぜなら、それ等（他の原因）は、意図無き作用を持ち、自己の原因の転変 (pariṇāma)によって近づく属性を有する。その本性 (prakṛti) から、そういうふうに存在しているものは、批難に価しない。[AAPV. 970²⁶⁻²⁸=HB 9*⁶⁻¹⁰] (na vai bhāvānām kacit prakṣāpūrvakaritā yato'yaṃ eko'pi samarthaḥ kim atrāsmābhir ity apare nivarteraṇ te hi nirabhiprāyavyāpārāḥ svahetupariṇāmopanidhidharmāṇas tatprakṛtes tathā bhavanto nopālambham arhanti)^{(69a) (69b) (69c)}

これは、Haribhadra が直接 HB を典拠としている場合であるが、ところで Jñānagarbha の〔論難1〕、Śāntarakṣita の示す〔反論②〕～〔論難4〕の展開に加えて、自性 (svabhāva) を巡る論議をつけ加えているが、その理由は、次のように考えられる。〔反論④〕で、果を生起し得る諸原因の集合と、それとは別の因の集合とは区別される、つまり果の生起に対して効力のあるものとなないもの、と区別されるが、その区別の根拠を Dharmakīrti は、自性 (svabhāva) に求めるわけであるから、⁽⁷⁰⁾Haribhadra は、その論議に言及するわけである。しかし、中観派にとって svabhāva とは、他に依存することのないものであ

(68) AAPV 970²⁴⁻²⁵.

(69) Haribhadra が、自ら直接 HB を典拠に、対論者 (Dharmakīrti) の見解として取り上げるものである。

(69a) HB 9*⁸ では te は無く、hi のみが (69b) の位置にある。

(69c) HB 9*⁹ では dharmās である。

(70) cf. 本稿 (66)。

り、因や縁によって作られない、はずのものである。⁽⁷¹⁾ Dharmakīrti は、ある諸原因の集合 (sāmagrī) に果を生起し得る効力を有した svabhāva が、あり得ると考えるから、中観派からすれば、その svabhāva は作られたものとなり、svabhāva とは言い得ないわけである。⁽⁷²⁾ したがって、svabhāva という限りは、単一な因にこそ、あり得べきである。これに対して、Dharmakīrti は、上に見たように、単一な因のみならず、他の諸原因も結果の生成に対して作用する旨を述べたのである。がしかし、この論議は、結局、〔論難 1〕と同じ問題に返ってしまうのである。それが〔論難 4〕に示される事柄である。⁽⁷³⁾⁽⁷⁴⁾

〔反論⑤〕以下は、自性の卓越性 (svabhāvātisaya) が論点である。この点に関して Dharmakīrti は、PV 量 (27) で「自性の卓越性が存在しない場合、個々に能力のないものが、集合したとしても、効力は存在しない。したがって、卓越性が成り立つのである。」(prthak prthag asaktānām svabhāvātisaye'sati / saṃhatav apy asāmarthaṃ syāt siddho'tisayas tataḥ ⁽⁷⁵⁾) と主張し、また HB ^(75a)でも、この点に言及している。この見解が〔反論⑤〕以下の論議に反映していると考えられる。なお Śākyabuddhi も、atisaya に言及している。⁽⁷⁶⁾

atisaya を巡る論議で Śāntarakṣita は、この〔SDK 14a〕《多因→一果》の検討を終えているが、Haribhadra は、さらに論議を展開している。⁽⁷⁷⁾ そこで

(71) cf. MMK XV-1.

na saṃbhavaḥ svabhāvasya yuktaḥ pratyayahetubhiḥ /
hetupratyayasamābhūtaḥ svabhāvaḥ kṛtako bhavet //

(72) cf. MMK XV-2.

svabhāvaḥ kṛtako nāma bhaviṣyati punaḥ kathaṃ /
akṛtrimaḥ svabhāvo hi nirapekṣaḥ paratra ca //

(73) AAPV 971¹⁻⁴.

そうであれば、そのとき、一つの因によって結果の自性が生ぜしめられる、ということが、まさしく別のものによってある、ということが得られる。同様にまた、異った特徴を有する因が存在する場合、異った特徴を有する果が知られないから、因の区別が、似た性質の区別されない果を生起する故、〔果の〕区別は、存在しないであろう。cf. 本稿 (47).

(74) 本稿 (52).

(75) PV-KĀRIKĀ, ed. by. Y. MIYASAKA 『インド古典研究Ⅱ』p.(6). cf. 木村俊彦『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究』p.56.

(75a) HB 15*11-12, 16*5. cf. 本稿 (53) (53a).

(76) 本稿 (114).

(77) cf. 本稿 (114u) AAPV 971⁹⁻¹⁰, (61a) AAPV 971¹⁰⁻¹⁸, (41) AAPV 971²⁸⁻⁹⁷².

は、直接知覚 (pratyakṣa) の無分別性 (nirvikalpatva)⁽⁷⁸⁾、結果をもたらす作用 (arthakriyākāritva)⁽⁷⁹⁾ が争点である。したがって、この点からも、この [SDK 14a] に関する全体の論議が、Dharmakīrti の理論を対象とする論難であると知られる。その中枢部分が、Jñānagarbha によって HB, PV を典拠として形成されたことは上に示した通りである。これを継承し、Śāntarakṣita 以下は、さらに論議を上乗せしたと言えよう。

III. SDK 14b

以下では、《多数によって、多数な〔事物〕は作られない》[SDK 14b] を巡って展開される論議は、元々は、Jñānagarbha が、Dharmakīrti の HB に於ける因果論を対象として形成したものであることを具体的に跡付け、さらにそれ等が、SDP を著わした Śāntarakṣita については言うまでもないが、Kamalaśīla, Haribhadra に継承されることを合わせて示すことにする。

Jñānagarbha は、《多数によって、単一な事物は作られない》[SDK 14a] を検討したことに続いて、以下の論議を展開している。

- [反論①] (1) そうではない。その理由は、多なる [因] によって多なる [果] が作られる (anekam eva kāraṇam anekāṁ kāryaṁ kuryād) からである。どうしてかと言うなら、[因] の自性 (svabhāva) 通りの特殊性 (viśeṣa) が、その (果の) 特殊性に機能する故、因の機能によって果の自性である特殊性が混同されることはないからである。[SDV 7b¹⁻²] (= AAPV 972²⁰⁻²³)
^(80 a ...)
 kāraṇasvabhāvaviśeṣasya kāryasvabhāvaviśeṣe vyāpriyamāṇatvena kārya-
 kāraṇavyāpāraviracitānāṁ svabhāvaviśeṣāṇāṁ asaṁkīrṇatvāt^(80 a)
^(81 ...)
 (2) [2a] というのは、1) 等無間縁である知に基づいて眼識が、知覚を本体とする。2) 眼根に基づいて、その知覚の本体自体が、色を把握し得るとい—

(78) AAPV 971²⁸⁻⁹⁷², 本稿 (41).

(79) AAPV 972⁷⁻⁸, 本稿 (14a).

(80) SDNS (2) p.121. fn (27), また viśeṣa が混同されないことを Kamalaśīla は具体的に示している。cf. SDNS (2) p.122¹¹⁻¹⁵.

(80a) cf. Māl P235b¹, D213b^{7-214a}¹.

(81)(81a) =SDP D30a¹⁻². cf. 本稿 (86), SDNS (2) p.121-122. fn (28) (29).

定した対応関係を有する。3) 対象に基づいて、それ(対象)と類似した性質のもの(形象)が、生起する。^{…(81)} [SDV 7b²⁻³] (= AAPV 972²³⁻²⁵ ^{(81 a …} tathā hi

1) samanantarapratyayād vijñānāc cakṣurvijñānasyopalambhātmatā 2) tasyaivopalambhātmanas cakṣurindriyād rūpagrahaṇayogyatāpratiniyamah

3) viṣayāt tattulyarūpatety)^{…(81 a)}

[2b] 事実としては、結果に区別はなくとも、諸原因の自性の区別に基づいて、
〔結果の〕諸の特殊性が、まさしく区別される。したがって、原因の区別によっても、その結果の特殊性に区別がないのではない。他の場合も、同様に考えられなくてはならない。^{…(82)} [SDV 7b³] (= AAPV 972²⁵⁻²⁷ ^{(82 a …} abhinnatve'pi vastutaḥ kāryasya nirvibharūpasya kāraṇānām bhinnebhyaḥ svabhāvebhya bhinṇā eva svabhāvā bhavantīti na kāraṇabhedē'py abhedas tatkāryasyeti)^{…(82 a)}

この〔反論①〕全体が Dharmakīrti のものであることをまず示そう。

(1) に相当するものは、

(3) ^{(83…} 区別された自性を有する眼等の協同因から単一な結果が生起するなら、原因の区別から結果の区別がありはしないであろう。(bhinnaśvabhāvebhyaś cakṣurādibhyaḥ saha-kāribhyaś ekakāryotpattau na kāraṇabhedāt kāryabhedāḥ syād iti cet)^{…(83)} [HB 9*13-14]

との詰問に対して Dharmakīrti が以下のように答弁しているものである。

(4) ^{(84…} そうではない。それぞれに〔諸の因の〕自性の区別によって、その(結果の)特殊性に機能するから、それ(因)の機能する結果の自性である。特殊性は、混同されはしないからである。(na, yathāśvaṁ svabhāva-bhedena tadviśeṣopayogatas tadupayogakāryasvabhāvaviśeṣa-saṅkarāt)^{…(84)} [HB 9*15-16]

続いて Dharmakīrti が言明するものは、⁽⁸⁵⁾ (2) と全体に亘って逐語的に一致する。その訳文を挙げることは重複故、省略するが、特に、論議の焦点となる部分であるので、その HB の Skt 文を挙げ比較検討の便としたい。

(82)(82a) = SDP D30a²⁻³. cf. (86).

(82a) ~~~部 svabhāvā は HB 11*3-4 [本稿 (86)], AAPV 973¹⁹ により viśeṣa の方がよいであろう。

(83) cf. 本稿 (80) (80a).

(84) cf. 本稿 (80) (80a).

(85) 本稿 fn (81)~(82a).

(5)

- [2a] ^{(86...}tathā hi 1) samanantarapratyayād vijñānāc cakṣurvijñānasyopalambhātmatā 2) tasyaivopalambhātmanāḥ sataś cakṣurindriyād rūpagrahaṇa-yogyatāpratiniyamo 3) viṣayāt tattulyarūpatety
- [2b] abhinnatve'pi vastutaḥ kāryasya kāraṇānām bhinnebhyaḥ svabhāvebhyo bhinnā eva viśeṣā bhavantīti na kāraṇabhede'py abhedas tatkar^{...86)}yaviśeṣasya. [HB 10*22-11*5]

以上のように、Jñānagarbha が、SDK 14b 及びその SDV で、対論者の言明 (1)(2) として取り挙げているものは、HB での Dharmakīrti の見解に基づいてのものであることが、いま見た各々の対応部分より明らかとなろう。この Jñānagarbha の (1)(2) を Kamalaśīla⁽⁸⁷⁾, Haribhadra⁽⁸⁸⁾ は、そのまま継承しているのである。この Dharmakīrti を対論者としていること及び、Kamalaśīla, Haribhadra が踏襲する点は、続いて Jñānagarbha が SDV で SDK 14b を巡って展開する論議を検討すれば、一層明瞭になる。先の〔反論①〕に対して Jñānagarbha は次のように論難、すなわち Dharmakīrti 批判を行うのである。

- [論難 1] ^{(89...}それは不合理である。1) 知覚を本体とすること等 [2) 色を把握すること, 3) それ (対象) と類似した性質のもの (形象)] が相互に区別されるなら、その知は多となろう。[知は] それ (知覚を本体とすること) 等と^{...89)}区別されないから。[SDV 7b⁴] (= AAPV 972²⁷-973²⁸ tad ayuktam yasmād upalambhātmatādīnām parasparato bhedē'abhyupagamyamāne tad vijñānam anekam syād upalambhātmatādibhyo'bhedād upalambhātmatādisvātmavat)^{...89 a)}

^{(90...}〔知と〕それ〔知覚を本体とすること〕等が区別されるなら、〔果である知は〕無因となろう。因の作用が〔知と〕別のもの〔知覚を本体とすること等〕に機

(86) cf. 本稿 (81) (81a), (82) (82a).

(87) SDNS (2) pp.121-122. [反論] fn (27)-(29).

(88) 本稿 (80a) (81a) (82a).

(89)(89a) cf. SDNS (2) p.123⁵⁻⁷.

(90), (90a), (91).

能するからである。^{…90)} [SDV 7b⁴] (=AAPV 973⁴⁻⁵ ^{(90 a …} bhede tebhyo'bhyupagamyamāne tad vijñānaṁ nirhetukam eva syāt kāraṇavyāpārasya vijñānād anyatropalambhātmatādiṣūpayogāt)^{…90 a)}

^{(91…} それ〔知覚を本体とすること〕等が相互に区別のないものとなろう。単一な知と別ではないから。そうであれば、因の〔機能する〕対象が区別されると構想することに、^(91 a) 何の意味があろうか。それ故、〔特殊性 viśeṣa と知との〕状態 (avasthā) の誤謬となろう。^{…91)} [SDV 7b⁴⁻⁵] (=AAPV 973⁸⁻¹¹ ^{(91 b …} tathā ca saty upalambhātmatādināṁ parasparabhedo na syād ekavijñānād ananyatvād vijñānasvātmavat ataḥ kāraṇavyāpāraviśayabhedakalpanā-^(91 a) vaiyarthhād bhinnasvabhāvebhyaś cakṣurādibhya ityādinā prāgukto doṣaḥ ^(91 c) samāpatati)^{…91 b)}

この〔論難1〕のポイントは、次の点にある。果である知と知覚を本体とすること等の果に具わる特殊性 (viśeṣa) を Dharmakīrti は区別する、なぜなら、彼は前者を単一とし、後者を多なるものとするからである。この点を Jñānagarbha 等は、まず論破の端緒としている。Jñānagarbha 等は、知と知に具わる viśeṣa とを区別せず、その立場から、果の属性 (dharma) としての viśeṣa が多であれば、それ等と区別されない知は、同じく多となるか、逆に viśeṣa も単一な知と区別されない故、単一となる、と知識論を破す場合の常套句⁽⁹²⁾によって追及している。なおまた、下線部分 (91a)、すなわち、〈因の機能する対象が区別されるとの構想〉とは、(5) [2a] [2b] の直前に述べられている次の Dharmakīrti の見解を指すであろう。

^{(93…} したがって、事実上、結果の自性は単一 (ekatva) であっても、諸の協同する縁 (pratyaya) は、多なる機能によって対象に作用する (naikopayogaviśaya)。したがって、その〔壺の製作の〕場合、原因の区別が、区別のある特殊性に

(91a) cf. HB 10*1-2.

両者（粘土と陶工）にとって、特殊な効力の働きかける対象が区別されるとしても (śaktiviśeṣaviśayabhede'pi)、その両者の生起した特殊性の区別を具えた結果には、自性の区別 (svabhāvabheda) は存在しない。

(91b)

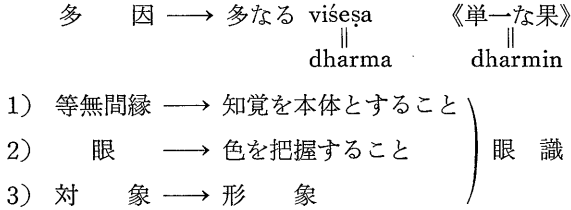
(91c) cf. [SDK 14a], 本稿 fn (47), (47a).

(92), (93).

機能するから、多なる果 (naikakārya) を取る。同様に、眼等から知が生起する場合にも、推し量られなくてはならない。^{…93)} [HB 10*19-22]

さらに (5) [2a] = [反論①] [2a] を指すことは明らかであろう、その関係を図示すれば、

図B



[反論②]

^{(94…}多と矛盾した (= 単一な) 結果の属性 (dharma) が、因と同じく区別される、と想定するなら、その (因の) 作用する対象が区別されると、考えられる。^{…94)} [SDV 7b⁵⁻⁶] (= AAPV 973¹²⁻¹⁵ ^{(94 a …} kāryasvabhāvasyānekasmād anupalambhātmatāder vyāvṛttimataḥ samutpattidharśanād dharmabhedakalpanām āsthāya bodhātmakān manaskārād bodharūpatetyādīnā kāraṇānurūpyeṇopalambhātmatādidharmabhedāḥ kāraṇavyāpāraviṣayabhedenakalpanāsamāropitaḥ)^{…94 a)}

この [反論②] は、すでに、先の [論難 1] の下線部 (91a) で取り挙げられていたものの反復であるが、以下の [論難 2] では、因の作用が問われる。

[論難 2]

^{(95…}因のその作用は、構想という作用によってなされたものであって、それ故、実効という点では、まさしく構想されたものである。そうであれば、結果は無因ということになる。因の作用が、諸の構想された本体を有するもの [知覚を本体とすること等] に機能するからである。^{…95)} [SDV 7b⁶⁻⁷] (= AAPV 973²⁰⁻²³ ^{(95 a …} tathā sati kalpanāśilpighaṭi iteṣv evopalambhātmatādiṣu kāraṇavyāpāro vyavasthāpyamānaḥ kālpanika eva bhūtārtho na syāt ^{…95 a)} evaṁ ca kāryam ahetukaṁ kāraṇavyāpārasya kalpitasvabhāveṣūpayogāt)

(94), (94a), (95), (95a)

この〔論難2〕では、知覚を本体とすること (upalambhātmatā) 等の種々な特殊性 (viśeṣa) の区別を主張する Dharmakīrti に対して、その種々の viśeṣa (=dharma) を作り出す因の作用 (kāraṇavyāpāra), Dharmakīrti の用語では upayoga, śakti ⁽⁹⁶⁾ に相当するであろうものを、構想されたものと難じ、その構想された因の作用によって形成される知覚を本体とすること等の種々の viśeṣa も、構想されたものと暗示している。

〔反論③〕

^{(97)...} 事実上、結果に区別はなくとも、諸の特殊性には区別がある。[SDV 7b⁷] ^{(97a)...} (=AAPV 973²⁴ abhinnaṃ ekaṃ kāryaṃ viśeṣāś ca bhinnāḥ) ^(97a)

この〔反論③〕は、すでに〔反論①〕[2b]=(5)の[2b]に表われていた通り、HBに見出される Dharmakīrti の見解を再出したものである。それに対し、

〔論難3〕

^{(98)...} そうであるなら、〔果の〕属性 (dharma=viśeṣa) と〔果である〕基体 (dharmin, この場合, cakṣurvijñāna) が、事実上、区別されていることになる。

〔一つの果が〕区別と無区別という二つの自性を有するからである。そうであれば、以前に述べた誤謬があることになる。[SDV 7b⁷-8a¹] ^{(98a)...} (=AAPV 973²⁵-974¹ evaṃ tarhi bhinnābhinnasvabhāvādhyāsitatvād dharmadharminor vastuta eva candratārakādivad bhedān na kevalaṃ vyatiriktaṃ eva sāmānyaṃ balād āpatati nānekatvayoḥ parasparāhatilakṣaṇo'pi doṣaḥ) ^(98a)

この〔論難3〕は、種々な viśeṣa (dharma) と単一な果 (dharmin) とが、別々のものとなると難じている。

〔反論④〕

^{(99)...} それ等の特殊性 (viśeṣa) も構想されたものに他ならない。[SDV 8a¹] (=AAPV 973¹⁷⁻¹⁸ yadi evaṃ te viśeṣāḥ kalpanoparacitatvena) ^{(99a)...} ^(99a)

この反論は、Dharmakīrti 自身が〈事実上、結果に区別はなくとも、諸の特

(96) HB 10*1-2. 本稿 (91a), HB 10*19-22 本稿 (93).

(97)(97a) cf. 本稿 (86).

(98), (98a), (99), (99a).

殊性が区別される。＞〔反論①〕〔2b〕^(99b)=(5)〔2b〕^(99c)と表明していたことから導出されよう。

〔論難 4〕

^{(100...} そうであれば、諸の原因の区別ある自性から、諸の特殊性の区別こそが生起する、ということも不合理である。構想概念によって設けられた区別というものは、原因の作用に依存しない。^{...100)}〔SDV 8a¹〕(=AAPV 973¹⁸⁻¹⁹ ^{(100a...} na hetuvyāpāram apekṣanta iti kāraṇānām bhinnebhyaḥ svabhāvebhyo bhinnā eva viśeṣā bhavanti na yuktam abhidhātum^{...100a)})

〔論難 4〕によれば、諸の viśeṣa が構想されたものなら、それ等は無因ということになり、Dharmakīrti の感官知の生起を巡る因果論の根幹が崩れてしまうことになる。

以下、Jñānagarbha は、〔SDK 14b〕を巡る論難を中間偈 (antaraśloka) によってまとめている。この部分に関しても、Kamalaśīla, Haribhadra との同定を示しておく。

〔論難 5〕

^{(101...} [1] 結果の区別はなくとも、諸の特殊性 (viśeṣa) に区別があり、なおかつ〔諸の viśeṣa と結果は〕別ではない、と汝 (Dharmakīrti) は主張する。それ故、〔そういった神業めいたことは〕ああ！ Īśvara によってなされたこと^{...101)}なのか。〔SDV 8a¹⁻²〕(=AAPV 973²⁴⁻²⁵ ^{(101a...} abhinnaṃ ekaṃ kāryaṃ viśeṣāś ca bhinnāḥ na ca kāryād vyatiriktaḥ iti matiḥ^{...101a)})

この [1] も、すでに〔反論①〕〔2b〕^(99b)=(5)〔2b〕^(99c)、〔反論③〕⁽¹⁰²⁾に表わされていたものの反復である。

[2] [知は] 知覚の本性 (bodharūpa) と別ではない。それ [知] は、色から生起しない。その [対象の] 形象と別ではないから、[知は] 色からも生起しよう。^{...103)}〔SDV 8a²〕^{(103a...} (=AAPV 974¹⁻³ bodharūpād ananyatve'bhyupagamyā-

(99b) 本稿 (82) (82a), (99c) 本稿 (86).

(100) cf. 〔反論①〕〔2b〕本稿 (82) (82a).

(100a), (101), (101a).

(102) 本稿 (97) (97a).

(103)(103a) cf. SDNS (2) p.123⁸⁻¹². fn (30c).

māne rūpād vijñānakāryasya na sambhavo bodharūpād ananyatvād
 bodharūpasvātmavat viṣayākārād ananyatvād rūpato'pi tasya sambhavo
 ...103 a)
 viṣayākārasvātmavad)

[3] ^{(104...}一つのものに同時に生起と不生起は、同様に、生ぜしめるものと、生ぜし
 めないものとは、実効という点で、どうして矛盾がないであろうか。[SDV
 ...104) ^{(104 a ...}
 8a²⁻⁸] (=AAPV 974⁴⁻⁵ ekatra kārye sambhavāsambhavau kāraṇe cai-
 katra janakājanakau yugapat tattvato virudhyate) ^{...104 a)}

[2][3]の前提となっている Dharmakīrti の理論とは、⁽¹⁰⁵⁾(5)(2a) = [反論①]⁽¹⁰⁶⁾(2a),
 つまり図 B に示した〈原因の区別が諸の特殊性 (viśeṣa) の区別を設ける〉と
 の因果関係の理論—因果の関係は個々にその対応関係が確定しているとの主張
 であることは、明らかであるが、Kamalaśīla は、その反論者の主張をさらに
 詳しく挙げている。

^{(107...}感官 (indriya) と対象から知覚を本体とすることは起こらないし、感官と等
 無間縁からは、対象を自性とするもの (形象) は起こらないし、対象と等無
 間縁からも、それぞれ一定した対象は起こらない。ということによって原因
 の区別が、まさしく [結果の] 区別を作る。諸原因の区別から [結果の] 諸
 の特殊性 (viśeṣa) の区別が生起するからである。 ^{...107)}

つまり、諸原因と諸の特殊性との対応関係は一定しており決して混同される
 ことはない、ということを具体的に示しているわけである。この点の矛盾を
 [2][3] は指摘している。すなわち、色 (rūpa) は、対象の形象 (viṣayākāra)
 を授けるという点では、知 (vijñāna) を生起せしめるもの (janaka) である
 とも言え、等無間縁を考慮した場合は、生起せしめないもの (ajanaka) とも言い
 得るのである。また同様な点で、知は色から生起 (sambhava) するとも、生起

(104)(104a) cf. SDNS (2) p.124¹⁻³. fn (30c).

(105) 本稿 (86) 1), 2), 3).

(106) 本稿 (81) (81a).

(107) SDNS (2) p.122¹¹⁻¹⁵. fn (29), SDP D30a¹⁻².

cf. Dharmottara, Pramānaviniścayaṭīkā. [現量] D. No. 4229. 261b⁸, 肯定的随伴
 性 (anvaya) と否定的随伴性 (vyatireka) に基づいて、非知覚と対立するもの (知覚
 の本体 bodharūpa) が等無間縁 (samanantarapratyaya) からこそ [生起する] のであ
 るが、対象と感官の二から [生起する] のではない。

しない (asambhava) とも言い得ることが出来る。この論難は、Dharmakīrti が、また〈因の機能によって果の自性である特殊性が混同されることはない〉

〔反論①〕⁽¹⁰⁸⁾(1)=⁽¹⁰⁹⁾(4) と主張していた点に打撃を与えようとしたものであろうし、また〔3〕の一者に、同時に相矛盾した事柄が存在してしまうことになるとの問題点は、Dharmakīrti の次の言明にも抵触しよう。

相互に依存し合うことによって、因果の二は、生起せしめることと生起せしめられることという自性を特徴として有するものである。(parasparāpekṣayā janyajanakasvabhāvalakṣaṇe kāryakāraṇe) [HB*4-5]

〔2〕〔3〕及び、この言明からすれば、知 (vijñāna) と色 (rūpa) とは因果の関係にないということにもなってしまうわけである。また、〈等無間縁から知覚の本体 (upalambhātmatā, bodharūpa) が生起する〉という理屈からすれば、色 (rūpa) が知の成立にとって必ずしも不可欠とも言い得ない⁽¹¹⁰⁾。つまり、等無間縁 (samanantarapratyaya) のみ、すなわち単一な因から認識は成り立つ、とも言い得る。この問題に対する Dharmakīrti の見解は先に示したところである。さらには、感官 (眼、耳等) も不必要ということであれば、この問題は、単一な因 (等無間縁) から単一な果 (眼識あるいは耳識等) が生起する場合 (=SDK 14d)⁽¹¹¹⁾ と類似した事柄となる。それはさて置き、上述の〔2〕〔3〕によれば、Dharmakīrti の〈事実としては、結果は無区別、単一であるが、原因の区別 (種々性) に応じて、結果の特殊性 (viśeṣa) が区別 (種々性) を有する〉との理論 (図B参照) は、眼識の成立を合理的に説明するものではないことになってしまうのである。等無間縁 (samanantarapratyaya) のみを立論すれば、事足りるとも言い得るからである。

《多数の因から単一な果が生起する》ことの問題点は Dharmakīrti 自身の理論〔4〕「原因の区別と無区別が結果の区別と無区別を設ける」^(111a) と抵触する点にあった。その論難が Jñānagarbha 以下によって [SDK 14a] に展開されて

(108) 本稿 (80) (80a).

(109) 本稿 (84).

(110) cf. 本稿 (67)~(69).

(111) 本稿 (128) 以下.

(111a) 本稿 (17) (61) (61a).

いた。この問題点を回避すべく、Dharmakīrti は、理論^(111b)[5]すなわち、結果は単一でありつつも、その果の有する特殊性 (viśeṣa) の多様性 (= 区別) を立論し、理論[4]との整合性を図ろうとした。しかし、果は単一で、かつその属性としての特殊性 (viśeṣa) の多様性を主張する、いわば、果の有する、単一さと多様性との二重構造を Jñānagarbha 以下は許さず、糾弾していたのが、[SDK 14b] での論議である。したがって、ここでの論議の展開が、Dharmakīrti の理論と最も符号し、HB に跡付けられるところであった。

IV. I. SDK 14c

以下では、〈単一な因から多なる果が生起する〉との第三のケースが争点となる。

[論難 1] ^(112...)眼等の〔汝の主張する〕それ自体の卓越性 (ātmātīśaya) というものによって、単一な果〔眼識〕を生起するなら、その同じ〔卓越性〕によって、別のもの〔果〕をも作るのであるか。[SDV 8a⁵⁻⁶] (= AAPV 974¹⁴⁻¹⁵ sa hetur yenātmātīśayenaikaṁ kāryaṁ janayati kiṁ tenaivāparaṁ)

[反論①] その同じ〔卓越性〕によって〔別の果も作られる。〕[SDV 8a⁶] (= AAPV 974¹⁶ tenaiva)

[論難 2] どうして〔果の〕区別と無区別が、無因 (ahetuka) とならないであろうか。因が無区別 (単一) なままであっても、果が区別される (多である) からである。[SDV 8a⁶] (= AAPV 974¹⁰⁻¹² na kāraṇabhedaḥ kāryasya bhedaka iti bhedo'pi bhedasya na hetur iti. tadā bhedābhedau viśvasyāhetukau syātāṁ)

[反論②] 別の〔卓越性〕によって〔別の果が作られる。〕[SDV 8a⁶] (= AAPV 974¹⁷ anyena)

[論難 3] そうであれば、その事物 (因としての卓越性) は、単一なものではなからう。〔別の卓越性は〕それ自体の卓越性 (ātmātīśaya) から区別がないことは^(112a)ない〔区別される〕^{...112)}からである。[SDV 8a⁶] (= AAPV 974¹⁷⁻¹⁸

(111b) 本稿 (18) (86) = (81) (81a) (82) (82a).

(112) cf. SDP D32a^{7-b2}, SDNS (2) pp. 127-128 [I. B. 2. 2. 3. 3]. fn (35) (35a) (35b).

evaṃ tarhi kāraṇābhedo na yuktimān. na hy ātmātīśayād ananyo bhāvaḥ^(112a)

以上で、[14c] に関する Jñānagarbha の論議の展開は終了している。Śāntarakṣita も、それ以上の解説を加えていない。したがって、この部分のみからは、[SDK 14a], [SDK 14b] の場合と異なり、反論者として Dharmakīrti を想定する根拠は明白ではない。しかし、ここでの反論者の主張は〈単一な因から多数の果が生起する〉というものであるから、この見解は、Dharmakīrti が PV 現量章 (533d) で対論者の追及「多は一から生起しない」(nānaikasmān^(112b) na ced bhavet) に対して、(534cd) で「単一なものであっても、二つの集合にまたがるから、その(単一なもの)は、多なるものを生起するものであると言われる」(ekaṃ syād api sāmāgryor ity uktam tad anekakṛt^(112c)), また PV 自比量 (83a) で「単一なものも多なる[果]を生起する (anekakṛd eko'pi^(112d))」と言明するものに根拠を求め得る。また Haribhadra は、先の Jñānagarbha の [SDK 14c] に加えてさらに論議を展開し、以下で言及する、その Haribhadra の論述から、反論者は、Śākyabuddhi, Devendrabuddhi であることが、知られてくる。したがって、[SDK 14c] も元々は、Jñānagarbha が、Dharmakīrti を反論者として、論議を展開したものと考えられる。

まず、ここでの、Haribhadra の対論者が、Śākyabuddhi である可能性を示そう。

Dharmakīrti は、PV 現量章 (251)~(254)⁽¹¹³⁾ で楽 (sukha) 等も知 (vijñāna) であることを、知 (心) も楽等 (心所) も共に、同じ因 (感官, 対象, 注意力等) から生起することを根拠に論じている。この点を解説するに際し Śākyabuddhi は、以下のように述べている。その核心部分を、Haribhadra は、AAPV で、対論者の見解として、[SDV 14c] に基づく部分の論議の展開中

(112a) SDP D32b² によって, bdag ŋid kyi khyad par las tha dad pa med pa ma yin pa'i phyir と読む。また AAPV 974⁸ は anya であるが、前述の読みに従って ananya とする。

(112b) 戸崎(下) p.213.

(112c) 戸崎(下) p.214. cf. Śāntarakṣita VNPV. p.38¹⁰. 本稿 (134b).

(112d) ed. by Gnoli. (SOR XXIII.) p.[45]². cf. 戸崎(下) p.213. fn (361). 本稿 (134b).

(113) 戸崎(出) pp.350-353.

に取り上げている。先に Śākyabuddhi の PVT(Ś) の訳出を挙げ、対応する部分の Skt 文を Haribhadra のものから挙げる。

[1]

(114a)

[Śākyabuddhi] どうして、事物に、同時に、二つの自性は、ありはしないのに、何故、同時に、一つの（同じ）自性によって生起するものが、別々のものであろうか。したがって、因の区別によって諸の果が区別される。もし、因の区別が無くとも（単一であっても）[D212b] 果が区別される（多である）なら、^(114a) [果は] 無因ということになってしまうだろう。

[反論] 楽と苦の自性あるいは心と心所の区別を述べるように、知^(114b) (bodha) と知でないものによって設けられても [果は] 区別されよう。

[Śākyabuddhi] 内的な因の特殊性 (viśeṣa) 故にというのは、感官と対象と注意力を本性としているものから、卓越性 (atīśaya) が生起するから、という意味である。つまり、あるそれ自体の卓越性 (ātmātīśaya) によって、集合 (sāmagrī) が、楽の本性を有した知 (bodha) を生起する、それとは別な卓越性 (atīśaya) によって、別の刹那にあるものが、苦 (duḥkha) の本性を生起するように、別の知 (bodha) である。^(114c) 各々の刹那に、区別された自性を有して存在するからである。各々の刹那に区別があっても、知^(114d) (bodha) を生起する共通した効力 (śakti) を超えない故、果の区別をも生ぜしめるなら、知の自性を生起するのであるが、知の自性でないものは [生起し] ない。例えば、稲の種子は、大地等 [P262b] の特殊性 (viśeṣa) によって卓越性 (atīśaya) を具える故、卓越性 (atīśaya) を有した [稲の] 芽を生起する場合にも、稲の芽をこそ生起するのであるが、大麦の芽を [生起するの] ではない。共通した効力 (śakti) を超えないからと言われる。……^(114e)

[反論] 同時に (tulyakāla) 存在する戒 (śīla) を具えた者の心と心所の二が、どうして、相互に区別されるのか。

(114) PVT(Ś) 現量 P262a³-263a⁷, D212a⁷-213a⁶., cf. 本稿 (75).

(114a)

(114b) D212b¹ による。(114c)

(114d) D212b³ によって読む。

(114e) D212b⁴ によって読む。

[Śākyabuddhi] これについても、答えなくてはならない。^(11f…) その集合 (sāmagri) 自体は、内的な特殊性 (viśeṣa) によって設けられるからである。そうであれば、集合と自性の区別を生起すると確定している本性を有するものが、特殊性 (viśeṣa) を具えていることから、知 (bodha) の区別を生起しよう。そうであれば、いかなる矛盾があろうか。多なる果に基づいて個々に確定している自性を有した因が、^(114g…) 個々の果に対して区別を自性としてあるのである。と いうのは、^(114g…) [1-1] 因の自性が変化して果を生起するのではない。もし、因の自性を捨てたものが、果となるなら、その場合、どうして、単一な自性を有するもの [因] によって、多 [なる果] が生起しようか、との論争となろう。^(114g) [D213a] 単一な自性を有するもの、すなわち単一な果に変化するという 単一な自性を有するものが、どうして別の果に基づいて変化しようか。 [因の単一な自性が] 変化するなら、果は、単一な自性を有すること になろう。⁽¹¹⁴ⁱ⁾ (⇒ AAPV 974¹⁹⁻²¹ syād etad yadi kāryasvabhāvāpattiyā kāraṇaṁ kāryaṁ janayati yathā Sāṃkhyasya tadā bhaved ekasyānekarū- pāpattivirodhād anekajananaṁ ayuktimat) ^(114j) [1-2] ^(11k…) [単一な自性を有した] 因が単一な果をも生起するなら、その [果] を生起せしめる自性が、近接し ているだけで、[果を] 生起する場合、⁽¹¹⁴ⁱ⁾ 多なる果を生起すると確定している [因の] 自性が、^(114m) 近接しているだけで、⁽¹¹⁴ⁱ⁾ 多なる果を生起するであろうことが、 どうして覆されようか。⁽¹¹⁴ⁿ⁾ 因の自性の [P263a] 区別と無区別によって、果の 区別と無区別が起こるといことこそが、区別と無区別を生起すると確定す る自性を有した [因] から、区別と無区別を自性とする果が、生起するとい うことなのである。^(114k) (⇒ AAPV 974²¹⁻²⁴ yāvataḥ bhedābhedajanānaniya- tasvabhāvākāraṇasaṁnidhimātreṇa bhedābhedakāryotpattau nedan codyam āskandati ayam eva hi kāraṇabhedābhedābhyāṁ kāryasya

(114f) D212b⁶ has /

(114g) cf. 本稿 (134d).

(114h) D213a¹ によって読む。

(114i), (114j), (114k).

(114l) ñe ba tsam gyis, D213a².

(114m)

(114n) gyis, P263a¹.

bhedo'bhedo vā yad bhedābhedajananiyatasvabhāvāt kārāṇād bhinnā-
bhinnakāryotpattir iti^(114p)

もし、区別を生起すると確定する自性を有した〔因〕から、無区別な〔果〕
が生起するそうといった場合、〔果は〕無因となろう。^(114q) (⇒ AAPV 975¹⁹⁻²⁰
syād etad yadi bhedajananiyatasvabhāvād abhedotpattir na tarhi
kāraṇasvabhāvānuvidhāyi kāryaṁ syād ity ahetukatvaprasaṅgaḥ)^(114r)

〔反論〕 単一な自性を有する〔因〕が、どうして多なる〔果〕を生起するの
か。

〔Śākyabuddhi〕 それ〔因〕が、そうになっている自性 (svabhāva) を有するか
らである。さもないければ、一なる〔果〕でさえも、どうして、生起しよう
か。この場合についても、何としても、自性 (svabhāva) が変化して、因が
果を生起するのではない、と述べ終っている。

〔反論〕 知 (bodha) と知でない自性を有したものが、何故、集合 (sāmagrī)
によって生起しないのか。

〔Śākyabuddhi〕 〔生起〕しない。それ〔因〕は、知を生起すると確定した自
性を有するからである。

〔反論〕 そうになっているある自性を有した〔因〕からこそ〔生起するの〕であ
るか。

〔Śākyabuddhi〕 自己の因から〔生起〕する。それは、また別の自己の因から〔生
起〕する。そうであれば、因の相続は、無始以来である。^(114s) ^(114t) (⇒ AAPV 971⁹⁻¹⁰
sa svabhāvātīśayas teṣāṁ svahetor ity ucyate tasyāpi tajananātmā
tadanyasmāt svahetor ity anādir hetuparaṁparā)^(114u) したがって、知 (bodha)
を生起するとの確定がある場合、知は、区別を生起する、自性という別の特
徴を特殊性 (viśeṣa) として有する故、知 (bodha) は、区別を生起するの
であるが、知と知でないものを自性とするのではない。そうであれば、〔楽
も知であると〕確定される。^{…114)} ……

(114p), (114q), (114r).

(114s) thog ma med pa can, D213a⁵ によって読む。(114t).

(114u) cf. 本稿 (77).

下線部及び [1-1] [1-2] から、この Śākyabuddhi の見解を、⁽¹¹⁵⁾ Haribhadra は [SDK 14c] を解釈し、論議を展開するに際し、対論者の見解として取り上げていることが知られるし、また、⁽¹¹⁵⁾ Kamalaśīla も Māl で Śākyabuddhi を対論者としている可能性がある。この間接的根拠と、先の直接的根拠とから、^(115a) Jñānagarbha は、[SDK 14c] 及びその vṛtti で、[SDK 14a] [SDK 14b] の場合と同じく Dharmakīrti を対象として論議を展開していると知られる。

IV. II. SDK 14c と SDK 15, 29

さらに Haribhadra は、以下に示すように [SDK 14c] を解説する最後の⁽¹¹⁶⁾ 部分で、Jñānagarbha の [SDK 29] [SDK 15] 及び各々の [SDV] を活用することによって、その解説を終えている。そのうち [SDK 15] に対する Śāntarakṣita の SDP から、Devendrabuddhi を対論者としていることが知られる故、[SDK 14c] が、仏教論理学派を対象としての論議であることが、先の Śākyabuddhi の場合と同様、知られ得るのである。なお、また [SDK 15] の [SDV] 中に、Jñānagarbha によって引用される『楞伽經』と『般若經』を典拠として「勝義不生」を論じるのは Kamalaśīla である。⁽¹¹⁸⁾ このように [SDK 14] [SDK 15] を巡る論議から、我々は Jñānagarbha から Haribhadra に至る学系を明瞭に見て取ることが出来るのである。そしてそれらは、何れも⁽¹¹⁹⁾ 仏教論理学派及び唯識学派を論難の対象としているのである。

(115) 特に Śākyabuddhi の見解 (114f) (114g) (114k) に示される、すなわち (114f) では、因の集合 (sāmagrī) から果である知に区別が生起する、つまり果の区別を生起する自性を有した因から多なる果が生起する趣旨が表わされ、(114g) からは、因の自性が変化して果が生起するのではないことが知られ、(114k) からは、因の自性の区別と無区別によって果の区別と無区別が生起する、との見解が知られる。これら三点は、Kamalaśīla が Māl の Pūrvapakṣa [P148b⁷-149a⁷, D138a⁴-b². 特に, P149a³⁻⁷, D138a⁷-b².] で対論者の主張を提出しているものと内容を同じくしている。したがって、このことは、Jñānagarbha, Śāntarakṣita の見解を継承している Kamalaśīla の、Māl での対論者は、Śākyabuddhi である可能性を示している。cf. 本稿 (134).

(115a) 本稿 (112c).

(116) AAPV 975²⁸-976¹².

(117) SDP D35a⁵.

(118) Māl. P168a³⁻⁵, D154b⁴⁻⁵.

(119) Kamalaśīla は上記 (118) に継続して、生・不生を巡る論議 [≡ SDK 15, 16] の締め括りの部分 [Māl P168b⁴⁻⁵, D155a³⁻⁴] で、対論者の見解「虚妄分別 (abhūta-

では、[SDK 14c] を解釈する最後部で Haribhadra が, Jñānagarbha をいかに継承しているかを, [SDK 29] [SDK 15] 及び [SDV] との一致点を中心に見てみる。

[SDK 29]

《因の自性 (svabhāva) によって多なる果が生起し得る》との対論者が, 中観派も承認する《顕現する形態のもの》すなわち「顕現するものを否定しはしない。知覚経験されるものを否定することは, 不合理である。〔直接知覚と矛盾する。〕」[SDK 28] との Jñānagarbha の説を想定して, 因の自性 (svabhāva) も, 「顕現している性質のもの (paridṛśyamānarūpatā) と言うことは出来ない」と Haribhadra は答論している。その理由として, Haribhadra は, 次のように [SDK 29] の [SDV] を運用して応答している。

^(122...) なぜなら, 色等の顕現を有した知に, 論書等に依拠することによって構想された性質 (parikalpitarūpa) を有する, 実としての生起 (tattvotpatti) 等 [識の顕現 (vijñānapratibhāsa), 根本原因 (pradhāna), 転変] のあり方を取るものは, ^(122 a) 顕現せず, 否定されるからである。 (AAPV 976¹⁻³ yasmād rūpādinirbhāsavati pratyaye' ^(122 a) pratibhāsamānasya śāstrādyāśrayeṇa parikalpitarūpasya tattvotpattyādyākārasya niṣedhād) [=SDV 12a⁷-b¹]^{...122)}

これに続いて, Haribhadra は [SDK 15] 及びその [SDV] を活用して [SDK 14c] に関する論議を締め括っている。以下では, Jñānagarbha の [SDK 15] とその [SDV] を元に, AAPV との比定を示そう。

[SDV 9a²-b²]

[反論] この世俗 (saṃvṛti) というのは, 何であるのか。

rikalpa) は, 三界の心, 心所である」『中辺分別論』(I, 8ab) を挙げ論難している。このことから, 対論者が唯識派であるとの根拠を直接, 唯識派のテキストに跡付け得る。

(120) SDV 12a⁶⁻⁷, この [SDK 28] が Haribhadra の AAPV p. 93. に引用されることは, 前掲 Eckel note (139).

(121) AAPV 975^{38-976¹}.

(122) cf. SDV 5b³. ここでの [識の顕現] とは唯識説ではなく, ウパニシャッド論者の見解と思われる。TS, TSP (328) (329). 中村元『初期のヴェーダ哲学』pp. 378-9.

(122a) AAPV 976¹⁻² では pratyaye pratibhāsamānasya であるが, SDV 12a⁷-b¹ (śes pa la mi snañ ba'i rnam pa) によって読む。

[A] [答論] あるものによって、あるいは、あるものに於て、真理 (tattva) が覆われていることが、世俗であると〔世尊は〕おっしゃっている。[SDK 15ab] ある知 (buddhi) によって、あるいはある知において真理が覆われている、そういった世間の人々の知識 (lokapratīti) が、世俗 (saṃvṛti) であると言われる。(= AAPV 976³⁻⁴ *yayā buddhyā tattvaṃ saṃvriyate yasyān vā buddhau sā tāḍṛśī lokapratītiḥ saṃvṛtir iṣṭā*)

[B] [楞伽] 經に、「諸の事物の生起は、世俗としてであり、勝義としては、⁽¹²³⁾ 無自性である。無自性に対する迷乱が、実世俗である。」と説かれるように。

[C] それ故、この全てのものは、真実である。勝義としては、真実ではない。[SDK 15cd] その世俗としては、この全てのものは、真実である。(= AAPV 976⁴⁻⁵ *tayā sarvaṃ idaṃ pratiyamānasvarūpaṃ viśvaṃ satyam. [anyathālikam]*) (世俗というのは) 世間の人々の知識通りに真実 (satya) であるという意味である。

[D] [般若] 經に、「スプーティよ、顛倒とは別に、凡夫が、あるところに留って、業 (karman) を形成する、そういった事柄というものは、毛髪⁽¹²⁴⁾の先端を置くだけすらもない。」と説かれるように。顛倒 (viparyāsa) とは、世間の人々の知識 (lokapratīti) である。論理 (yukti) の三相の活用通りに導かれる真実というものに至るまでのものが〔世俗である。〕

[E] 《Devendrabuddhi の反論⁽¹²⁵⁾》

世俗が無存在 (abhāva) であるなら、生起 (utpāda) が存在であるから、その場合、その一つの事物に〔結果をもたらすこと (arthakriyā)〕に適合す

(123) Laṅkāvatāra Sūtra, ed. by B.NANJIO. ch.X-429.

bhāvā vidyanti saṃvṛtīyā paramārthe na bhāvakāḥ /
niḥsvabhāveṣu yā bhrāntis tat satyaṃ saṃvṛtir bhavet //

BhK I [202]⁵⁻⁶.

bhāvā jāyante saṃvṛtīyā paramārthe'svabhāvakāḥ /
niḥsvabhāveṣu bhrāntiḥ sā saṃvṛtir matā //

その他 MaI, BhK II 等での引用については SDNS IV. p.49. fn (115).

(124) Aṣṭadaśasāhasrikāprajñāpāramitā, SOR. XLVI. ed. E.Conze. p.123³⁻⁵.

nāsti Subhūte antaśo bālāgrakoṭīnikṣepamātram api vastu yatra sthitvā bālāpṛthagjanā karmābhisamkurvanti anyatra viparyāsenā.

(125) 本稿 (117).

ることとしないことが同時に起ってくる。世俗が、生起することであるなら、また世俗としての生起 (saṃvṛtyopāda) ということについての諸の学者の言葉の意味は、生起として生起すること (utpattyotpāda) であるから、何と素晴らしいことであろうか。この生起ということが世俗であって勝義として不生 (anutpāda) であるなら、不生として諸事物は不生であると述べるなら、すでに証明されていることを証明すること (siddhasādhya) となる。このことによっては主張とはならず、何が証明されることになるのか。論理に基づいて、このやり方で、住 (stṭhiti) 等も同様に言われる。(= AAPV 976⁶⁻¹¹ abhāvaḥ saṃvṛtīr utpādo bhāva itī yugapad arthakriyāyām yogyam ayogyam vastv abhyupagatam. athotpādaḥ saṃvṛtis tadā saṃvṛtyotpāda ity asya vākyasyotpattyotpāda ity abhyupagamān na kiṃcid anīṣṭam āpatitaṃ. tathā'nutpādaḥ paramārtha ity evaṃ paramārthena notpāda ity asyānutpādena notpāda ity arthaḥ. tathā ca siddhasādhya-tetyādi.)

《Jñānagarbha の答論》

それらの〔反論〕は、関係のないものであって、〔世俗の〕言葉の意味でないものを構想して、反論者は、この世俗の特徴 [lokapratīti ということ] から逸脱しており、思い込みによって反論している。(= AAPV 976¹¹⁻¹² tat saṃvṛtilakṣaṇānabhiṣṭatayā prakṛtānupayogikaṃ kevalam abhimānād asaṃgatam uktaṃ)

論理 (nyāya) によって考察すれば、真実 (satya) ではない。それ以外には、真実である。それ故、一つのものに、真実であることと、非真実があることが⁽¹²⁶⁾ 〈Dharmapāla の指摘するように〉 どうして矛盾しようか。論理によって考察すれば、存在でない。それ以外には、存在である。それ故に、一つのものに、存在であることと非存在があることが⁽¹²⁷⁾ 〈Devendrabuddhi の指摘するように〉 どうして矛盾しようか。

(126) SDP D36a¹. Dharmapāla の見解については、梶山雄一『清弁・安慧・護法』(密教文化第64・65号) p.151¹³⁻²¹. 松本史朗『Jñānagarbha の二諦説』(仏教学第5号) p.130-131.

(127) SDP D36a³. Devendrabuddhi の見解については、松本史朗『仏教論理学派の

〔F〕 勝義としては、不生である。この言葉の意味は、論理に基づけば、不生ということであり、他の場合についても、同様に、理解しなさい。〔SDK 16〕

以上の〔SDK 15〕及びその〔SDV〕をさらに先に見た〔SDK 29〕を、Haribhadra は〔SDK 14c〕を解釈する部分で採用していることが知られた。Jñānagarbha の見解を包括的に解釈する Haribhadra の考証の仕方から、〔SDK 14c〕での論難も、Jñānagarbha が元来、Dharmakīrti, Devendrabuddhi の見解に向けられたことが知られよう。また Haribhadra にあっては、さらに Śākyabuddhi の見解をも、論難のターゲットとしていることが知られた。続いて第四のケース〔SDK 14d〕を設けて論難する Jñānagarbha の論法を検証する。

V. I. SDK 14d

〔SDV 8a⁷-b¹〕⁽¹²⁸⁾

〔反論〕 単一な因によって単一な果こそが、作られるに過ぎない。(=AAPV 976¹⁸ athaikam eva kāraṇam ekaṁ kāryaṁ kuryād)

〔論難1〕 そういうことは、あり得ない。眼等が、自己の種姓と等しい刹那を生起するものであるから〔自己の識を生起させる性質がないなら〕あらゆる有情は、盲人や聾者等となってしまうからである。(=AAPV 976¹⁴⁻¹⁶ tathā hi cakṣurādīnāṁ svajātiyakṣaṇajanakatvena svavijñānanakatvābhāve'ndhabadhirāditvaprasaṅgaḥ spaṣṭaḥ prasajyate)

〔論難2〕 自己の識を生起させる性質があるなら、〔先に指摘した過失はないのであるが、別の過失が存在する〕自己の種姓〔つまり、眼等の種姓〕が断絶される故、〔知の刹那の後に、眼等は存在せず、識も存在しない。⁽¹³⁰⁾〕したがって、何としても不合理である。〔単一な因によって、単一な果が作られる⁽¹³¹⁾ということは〕認められない。(=AAPV 976¹⁶⁻¹⁸ svavijñānanakatve

二諦説(出)〔南都仏教第45号〕p.102下~103上.

(128) SDP D32b²⁻⁷, SDNS (2) p128. [I.B.2.2.3.4.] fn (36). 本稿 (134).

(129) SDP D32b⁴⁻⁵.

(130) SDP D32b⁵⁻⁶.

cābhyupagamyamāne cakṣurādijātyucchedenaikasmāj jñānakṣaṇād
ūrdhvaṁ na cakṣurādayo nāpi jñānam iti tad evāndhatvādikam anāyā-
sena jagataḥ prāptam)

[SDK 14d] での反論者の主張は奇異にも思えるが、Dharmakīrti の見解は《原因の区別(多)と無区別(一)が結果の区別(多)と無区別(一)を設ける》⁽¹³²⁾ という点にあったから、その各々のケースが [SDK 14a~c] に取り挙げられた検討されていた。したがって、ここでは第四のケースとして《原因の無区別(一)が結果の無区別(一)を設ける》を検証しているものと思える。しかし、《単一な因から単一な果が生起する》との第四のケースが設けられ上記のように、Jñānagarbha によって論駁されているとはいえ、その前提となる理論が、必ずしも Dharmakīrti によってそのままの形で主張されたとは言い得ないであろう。なぜなら Dharmakīrti 自身が、PV 現量 (534ab) で「単一な[因]から単一な[果]は決して生起しない。集合からあらゆるものが生起する。(na kiñcid ekam ekasmāt sāmagryāḥ sarvasambhavaḥ)^(132a)」と表明するからであり、さらに、Kamalaśīla の Māl の Pūrvapakṣa で、反論者自身が、その第四のケースの不合理なことを指摘しているからである。すなわち、本稿 (115) で、Māl, Pūrvapakṣa のそこでの反論者は Śākyabuddhi の可能性があることを示したが、その同じ pūrvapakṣa で、反論者は Jñānagarbha による論難を取り上げ、その論難が不合理であると反駁し、次のように論じ返している。⁽¹³³⁾

V. II. Māl, pūrvapakṣa.

^(134...) というのは、まず、盲人や聾者等のものとなろうと言われたことは、認められないから、不合理である。^(134a...) 全てのものは、集合 (sāmagrī) からこそ生起

(131) SDP D32b⁶.

(132) 本稿 (17) (61) (61a). なお、区別を多、無区別を単一と数量的に理解するものは、PV 現量 (278), 戸崎(下) p.374.

(132a) 戸崎(下) p.214. cf. VNPV p.38¹⁸, D. No.4239. Vol.17, 82a³⁻⁴. 本稿 fn (112c).

(133) Māl P148b⁷-149a³, D138a⁴⁻⁷.

(134) Māl P149a³⁻⁷, D138a⁷-b². cf. Māl P234a¹⁻², D211b⁵⁻⁶, cf. PV 現量 (534ab). 本稿 (49) (49a).

する故、単一な〔因〕から単一な〔果〕が生起することは、全くない。^{…134a)}

単一な〔因〕から多なる〔果〕が生起することと、多なる〔因〕から単一な〔果〕が生起することが、^(134b)
^(134e) どうして矛盾するであろうか。原因の自性が、變化して、〔果を〕生起せしめるとは、主張しないけれども、^(134d) かえって、灯火等には、多なる自性が具わっており、存在することのみで、多なる自性を有した果を生起することが、^(134e) 知られる。原因の区別が〔果の〕区別を設けなくなるということもない。原因の特殊性 (viśeṣa) から結果の特殊性が生起するからである。因の特殊性から果の特殊性が生起する、ということこそが、^(134f) … 134) 因の区別が〔果の〕区別を設ける、ということに他ならない。

この (134a) は、PV 現量章 (534)⁽¹³⁵⁾ab での Dharmakīrti の見解である。したがって、Dharmakīrti 自身が、そこで「単一な因から単一な果は生起することはなく、因の集合から、あらゆる果が生起する」と言明しているから、この Jñānagarbha による第四のケース [SDK 14d] の検討は、Dharmakīrti 批判というよりも、因果各々の一・多の組合わせによる網羅的な、言わば、四句分別の形に整備され検討される必然性から導出されたものと見るべきであろう。このことは、次の事柄からも支持されよう。Jñānagarbha は、この [SDK 14] の締め括りの部分で、

一は、創造するもの (因) ではない。多も創造するもの (因) ではない。一と多以外に何か別な創造者 (因) があるなら、述べよ。一は、創造されるもの (果) ではない。多も創造されるもの (果) ではない。一と多以外に何か別の創造されるもの (果) があれば、述べなさい。[SDV 8b⁵⁻⁶]

と、因・果各々に一・多を想定し、その全てを退けている。

因・果各々の一・多の組合わせからなる因果論の四種の型が、この [SDK 14abcd] で網羅的に論難されるわけである。したがって、この [SDK 14] 全

(134a) cf. 本稿 (132a).

(134b) cf. PV 現量 (534cd), 本稿 (112c). PV 自比量 (83a), 本稿 (112d).

(134c) cf. PV 自比量 (73), 本稿 (46a).

(134d) cf. 本稿 (114g).

(134e) cf. Dharmakīrti の *Vādanyāyaprakaraṇam*, p. 382²⁻⁴. ⇒ SDNS (2) p. 126²⁻⁴.

(134f) cf. 本稿 (81) (81a) (82) (82a) (84) (86).

(135) cf. 本稿 (132a).

体が、Dharmakīrti の因果論の論難を目的として形成されたと見て間違いないであろう。

なお、上記の Kamalaśīla の Māl, Pūrvapakṣa の (134b) は、PV 現量章 (534)cd「単一な(因)であっても、二つの集合(sāmagri)においてあるから、その(単一な因)が、多なる(果)を生起すると言われる」(ekam syād api sāmagryor ity uktam tad anekakṛt⁽¹³⁶⁾)に同定されようし、(134c)は、P V 自比量 73, 82aに比定される。(134d)は、Śākyabuddhiの見解、本稿(114g)に等しく、(134e)は、[HB 10*⁽¹³⁷⁾22-11*⁽¹³⁸⁾5] [HB 9*⁽¹³⁹⁾15-16] で Dharmakīrti が表明するものに等しい。したがって、Kamalaśīla の Māl, Pūrvapakṣa でのその反論者の主張は、Dharmakīrti 及び Śākyabuddhi の見解であると決定し得よう。また Kamalaśīla が PV 現量章(534)を反論者、Dharmakīrti の見解として採用することは、師 Śāntarakṣita が、VNPV⁽¹⁴⁰⁾で、その Dharmakīrti の見解を取り上げ、因果論の論難を展開することに範を得たものである。

結 論

以上の検証の結果、明らかにし得た事柄は、次のものである。

- 1) Jñānagarbha の SDK 14 に端を発する『四極端の生起の論難』で、Dharmakīrti の PV 自比量(73)(82a)、現量(534ab)が前提となり、また HB の対論が背景となって《多因→一果》を破す目的で [SDK 14a] が形成され、PV 現量(534abc)、HB の自性を巡る理論を踏えて Śāntarakṣita 等によって論議が付加された。さらに HB に見られる《多因→多果》を破すべく [SDK 14b] が展開し、PV 現量(534cd)、自比量(83a)を前提として、《一因→多果》を論破すべく [SDK 14c] が表わされ、PV 現量(534ab)が契機となって、《一因→一果》を詰問すべく [SDK 14d] が示された。

(136) 戸崎(下) p.214. VNPV. p.38¹⁹.

(137) cf. 本稿(46a).

(138) cf. 本稿(86)=(81)(81a)(82)(82a).

(139) cf. 本稿(84)=(80)(80a).

(140) cf. 本稿(4a)(132a)(136).

これ等 [SDK 14 abcd] は、言わば四句分別の形式に整備され、網羅的に、Dharmakīrti の因果論を論破する目的で Jñānagarbha によって『四極端の生起の論難』として、形成された。論難の要点は、Dharmakīrti の理論 [4] つまり「原因の区別と無区別が、結果の区別と無区別を設ける」に関して、区別を多、無区別を単一と解し、それを逆手に取って因果各々の数量的矛盾を指摘することである。またその因果論を組成しているものが、因果効力 (arthakriyāsamārtha) の理論及び「因果関係は、直接知覚 (pratyakṣa) と無知覚 (anupalabdhi) によって証明される。」との理論であることが、[SDK 12, 13] との関係から、また Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra の [SDK 14] に対する解説から知られる。

- 2) それが、後代 Catuskōtyutpādapratīṣedhahetu⁽¹⁴¹⁾ と呼ばれる無自性論証の方式として、Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra に継承され、彼らの学系を如実に示すものとして発展した。
- 3) 彼らは、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を軸とする Dharmakīrti の因果論を活用し、その効力を有するものを実世俗 (tathyaśamvṛti), それを有さないもの (外教や他学派の見解) を邪世俗 (atathyaśamvṛti) と位置付ける。(←SDK 12) また Dharmakīrti の「因果関係は、直接知覚 (pratyakṣa) と無知覚 (anupalabdhi) によって証明される」との理論を、有形象・無形象知の観点から、また無知覚を直接知覚と規定する点から破している。(←SDK 13), これ等 SDK 12, 13 及び 15 が, SDK 14 すなわち具体的な因果論の前提となることは、Haribhadra の包括的な論議の展開から知られる。
- 4) そのことから、Haribhadra は、Dharmakīrti の HB や PV 自比量での見解のみならず、Devendrabuddhi や Śākyabuddhi の見解をも論難の対象とし、Jñānagarbha の SDK 14 及びその SDV を元に、さらに論議を上乗せしている、ことが知られる。
- 5) この論議に関する Kamalaśīla の Māl, Pūrvapakṣa での反論者の主張

(141) 本稿 (4).

(142) 本稿 (69).

は、Dharmakīrti 及び Śākyabuddhi の見解である。また、Kamalaśīla は SDNS, Māl で、この『四極端の生起の論難』を展開するに、Śāntarakṣita の VNPV からも影響を受けている。

- 6) Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra の無自性論証の特徴は、Dharmakīrti の理論を実世俗として踏襲し、かつ又、pramāṇa に基づいて Dharmakīrti 批判を展開することにより達成しようとするところにある。すなわち、彼らにとり、勝義である〈一切法無自性〉を論証するには、Dharmakīrti の因果論を pramāṇa に基づいて論駁することも不可欠であったのである。

〈1988.10.26.〉